

『海東諸国紀』の「琉球国之図」の地名と『おもろさうし』

著者	福 寛美
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	6
ページ	63-108
発行年	2009-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00022605

『海東諸国紀』の「琉球国之図」の地名と『おもろさうし』

福 寛 美

はじめに

琉球王国は17世紀になるまで外交文書を除き、王国の内側で文字資料をまとめることがなかった。そのため、琉球王国の内部事情を知るには琉球を訪れた外国人の見聞によるしかない。

『海東諸国紀』は李氏朝鮮最高の知識人でハングル制定にも寄与した申叔舟(1417-75)が日本と琉球の歴史・風俗・言語・通交の実情を克明に記した書(1471)である(申叔舟著、田中健夫訳注、1991)。そこには琉球の歴史と国俗を記した「琉球国紀」、附録として琉球の民俗を記した「琉球国」、そして琉球を含む「海東諸国総図」「日本国西海道九州之図」「琉球国之図」などの地図が収録されている。

これらの地図の特徴は朝鮮から見て重要な地や島が大きく描かれていることである。例えば、「海東諸国総図」において対馬島、一岐(壱岐)島、琉球こと沖縄島は実態よりも遥かに大きく描かれている。一方、夷島(北海道)は小さく描かれ、本州の東方海上には架空の島である扶桑、瀛洲、女国、羅刹国、そしてやや南方には三仏齊(スマトラ島のパレンバン)の旧名)が見える。三仏齊がパレンバンであるなら、ここに描かれるはずはない。

この地図は日本についての朝鮮側の理解がどのようなものだったかを端的に示している。つまり、朝鮮側が深い関心を持ち、通交のあった地や島が大きく描かれ、あまり関心の及ばない場所は虚実取り混ぜて描かれる、ということである。

また、「琉球国之図」の琉球周囲の島々も実態に比べて大きく描かれている。賀通連城(勝連ぐすく)の東方に描かれる「通見島(津堅島)」、中貝(具)足城(中

城ぐすく)の東方に描かれる「有見島(宇堅島)」、そして島尻郡豊見城村の無人島である瀬長島瀬長城に比定される「阿義那之城」、「計羅婆島即ち百島(慶良間列島)」などは現代の離島観念を覆す大きさを地図上で誇る。それは、15世紀の海上通航の際、それぞれの島に朝鮮からみて侮り難い勢力が割拠していたことを示す。

東アジアの海に倭寇が割拠していた琉球王国成立期、琉球のみが沖縄島に自閉し、沖縄島内部での権力闘争を経て琉球王国を樹立した、という従来の定説に無理があることは、他所で指摘した(吉成・福、2006／吉成・福、2007)。

「日本国西海道九州図」は種島(種子島)、亦島(屋久島)、硫黄島、恵羅武(口永良部島)、口島(口之島)、中島(中之島)、悪石(悪石島)、黒島、小〔臥〕蛇島(臥蛇島)、諏訪湍(諏訪之瀬島)、渡賀羅(宝島)について、航路の基点を上松(浦)とする。例えば黒島については「上松(浦)を去ること一百三十八里、薩摩州を去ること二十里なり」とある。そして渡賀羅については「上松(浦)を去ること二百六十里、大島を去ること十里なり」とある。

上松浦とは草野荘・松浦荘を含む地域で、現在の東松浦郡と唐津市および伊万里市東部に及ぶ地域である。この地域は倭寇の一大拠点であり、そこを基点に薩南とトカラ列島の島々に伸びるルートは、まさに倭寇ルートである。

トカラ列島は中世、七島と呼ばれ、ヤマトと琉球の境界と目されていた。先学によると七島船頭衆は琉球、中国の海域を自在に航海する海洋民であり、秀吉の朝鮮出兵の際には先導役を務めている。また、琉球の貿易にも従事していたことが知られる(吉成・福、2007、192～193)。

トカラ列島の臥蛇島には青磁算木文香炉が伝世する。亀井明徳によると、この香炉は鳥取県の関金地蔵院経塚出土の香炉と同巧であり、経塚の擬宝珠には至徳二年(1385)の刻銘があり、埋納の時期が明確である(亀井明徳、1986 b、89)。この青磁香炉を亀井は明代初期ないし元代後半の龍泉窯でつくられたもの、とする。

同じくトカラ列島の悪石島の迫寺社にはタイのスワンカローク窯の青磁鐏文壺が伝世する。この製品はおおよそ15～16世紀のものである、という(亀井、1986 b、63)。また悪石島にはスワンカローク窯の褐釉双耳瓶が二口、伝世する(亀井、1986 b、65)。亀井は、タイ陶磁器は全体の出土量が少ないが、沖

縄の遺跡からよく発見されており、東南アジアの陶磁器をもたらしたのが琉球の南蛮貿易によることを物語っている、と述べる。

下野敏見は応永三年（1396）、トカラ列島の口之島を支配していた肥後盛正の母が息子の家督相続の件で鹿児島に上国し、ついでに京都へ上京し、観世音菩薩像を購入して帰島した、と肥後氏の系図に書かれていることを紹介する。下野によると、島津の殿様が鹿児島にいなかったため、後を追って京都見物がてら上京したものらしい、という。

下野は種子島の支配者、種子島氏が肥後氏の系統であると言われていること、そして種子島氏の活動は14世紀頃から種子島で顕著になってやがて島主権を確立したのであり、口之島の肥後氏の動きと大体一致していることを指摘する（下野、1999、194）。

下野はまた1429年、宝島の島主の平田氏が琉球国の布や酒を鹿児島へ運んで交易し、以後、鹿児島と琉球の間の通船の案内役をしたことが平田氏の系図に書かれていることを指摘する。そしてこれらの事柄をふまえ、15世紀の初頭から中頃、トカラの勢力が琉球と薩摩の双方に通じて両者の中継貿易をしていたことを意味する、と述べる（下野、1999、195）。

臥蛇島に伝世した青磁算木文香炉と同巧の香炉が鳥取県の関金地蔵院経塚に埋納された時期（1385）と口之島の肥後盛正の母の鹿児島への上国と上京（1396）したとされる年代は近い。そして悪石島に伝世するタイの陶磁器は、宝島の平田氏の鹿児島と琉球を行き来するあり方と無縁ではない。

つまり、薩南からトカラ列島にかけての地域に、肥後氏の肥後（熊本）の名字に代表されるヤマトから南下した勢力が割拠しており、時々の利害に沿って琉球方にも鹿児島方にも味方した、ということである。そして彼らは操船に巧みで、島主の母は自ら上京して仏像を購入するほど財を蓄えていた、とされる。このトカラ列島に伝世する輸入貿易陶磁器と記録に残る島主の一族のあり方が倭寇的であることは、指摘するまでもない。

『おもろさうし』の巻十三、与論の親のろが航海の無事を祈るおもろには「とからあすび」という神が登場する（九二八、九三三）。「とから」はトカラ列島のトカラで、「あすび」は神遊びのアスビであり、操船に巧みなトカラ列島の人々の総称が航海守護の神の名となるのは納得できる（吉成・福、2007、274）。

『海東諸国紀』の「琉球国之図」には航路が白い線で示され、「赤間関・兵庫浦を指す。恵羅武を指す。肥前州上松浦を指す」とある。倭寇ルートに他ならないこの航路は、松浦党が支配していた壱岐を経て北は朝鮮半島や中国、そして日本本土や更に北方、南は琉球を経て東南アジア、あるいは更に広い海域に伸びていた可能性がある。

その倭寇ルート上の重要な島、沖縄島はかつて倭寇が割拠した島だった。『おもろさうし』には王府成立以前、地方に群立していた男性権力者達を賛美するおもろ群、地方おもろが集成されている。彼らはてだ、世の主、按司などとおもろで称されているが、彼らがいた場所から輸入貿易陶磁器が出土することは亀井明徳が夙に指摘している（亀井、1986年a、378）。

彼らの活躍を断片的ながら活写する地方おもろの世界は、彼らがヤマト渡来の刀剣や鎧を好み、酒を愛飲し、海の彼方に船で乗り出し、権益の拡大に勤しんでいたあり様を伝える。それらのおもろから『海東諸国紀』の「琉球国之図」の地名についての知見を得ることを目標にするのが、小論である。

「琉球国之図」と「琉球国図」

『海東諸国紀』の「琉球国之図」と同じ地図を基にして作成された地図に「琉球国図」がある。「琉球国図」は1696年、筑前黒田藩士竹森道悦が大宰府天満宮に奉納した。この二枚の地図の基になっているのは、琉球国王使として朝鮮と琉球の間を往還した博多僧の道安が朝鮮にもたらした地図である。道安が朝鮮を訪れ、地図をもたらした経緯を田中健夫は次のように記す（田中、1997、130）。なお田中がカッコ内に注記した事柄は省略し、『海東諸国紀』の本文引用箇所は岩波文庫版の本文に書き改めた。

一四五三年三月に琉球国中山王尚金副の使者と称する道安が慶尚道富山浦に到着した。朝鮮側では道安が琉球国人ではないことを見抜いていた。このとき道安は地図を持参していて、五月の礼曹の宴のとき博多・薩摩・琉球間の距離を説明した。七月になって、礼曹では「日本僧道安費来日本・琉球両国地図」を重視し、模画四件を製作して表装し、宮中・議政府・春

秋館・礼曹の四ヶ所に分置することを建言して実行された。申叔舟がこれらの地図を容易に見ることのできる立場にあったことはいうまでもない。道安はこののち一四五五年に受図書人となり、一四五七年には護軍の職を受けた。一四五九年にも朝鮮に到ったが、このときは琉球国王の書契や礼物を対馬で奪われたと報告している。『海東諸国紀』には「筑前州」の条に「護軍道安」をあげ、「曾て琉球国使として我に來聘し、是に因りて往來す。乙亥（一四五五）年、來りて図書を受く。丁丑（一四五七）年、來りて職を受く。大友殿の管下なり」としている。

「護軍道安」の護軍は武官の職名だが、実務はない。道安は博多の通交者（博多商人）であり、その子の司正林沙也文（司正は武官、林左衛門か）も1470年、父に従って朝鮮王朝に赴き、職を得ている。父と同じく「大友殿管下」と『海東諸国紀』に記される。博多商人で琉球国王の使いだった道安がもたらした地図は、朝鮮で珍重されたのである。

田中健夫は前掲書で大西・浦傍・玉具足・中具足・池具足・郡島・粟島・鳥島など漢字の音訓を併用して地名を表記しており、この表記は日本人の手になったものだろう、とする東恩納寛惇の見解をあげる。そして「那波皆浦（ナハミナト）」などは日本人の表記としか考えられない、と述べる（田中、1997、126）。

なお玉城を玉具足、中城を中具足、池城あるいは伊計ぐすくを池具足と表現することは、あたかもそこに具足を身につけた武者が参集しているような印象を与える。

田中はまた「琉球国図」の沖縄島周辺の島嶼の記載が詳細正確であることから、「図の作成者は琉球渡海の経験を持つ日本人—おそらくは博多の道安—と考えることができよう」と述べる（田中、1997、126～127）。それでは、琉球の地名がいかなる認識の上に立って道安に選択されたか、ということが問題になる。

1429～43年まで朝鮮の『世宗実録』に頻出する人物がいる。彼の名は早田六郎次郎という。早田六郎次郎の父、早田左衛門太郎は対馬の賊首で応永の外寇（1419）の際、朝鮮側に有利になるよう働き、交易で優遇された。その息子

が琉球国王使として琉球と朝鮮の間を往還していたのである。

賊首とは倭寇である。倭寇や博多商人の目的が交易による権益であるのは当然である。彼らが関心を示すのは取引相手や敵対者であり、倭寇ルート上の琉球弧に拠点をおく権力者である。そのような人々の本拠地が道安のもたらした琉球の図に描かれている、と考えるべきである。

以下に道安がもたらした地図から作成されたと考えられる二枚の地図の地名とおもろの有無、比定地をあげる。『海東諸国紀』は田中健夫（岩波文庫、1991）、「琉球国図」については安里進（山川出版社、2006）の見解に依拠する。

琉球国図（『海東諸国紀』）	琉球国図（竹森道悦）	おもろ（比定地）
国頭城	国頭城（根謝銘ぐすくか）	おもろ無し
池具足城（名護市池城）	池具足城（伊計ぐすく）	名護、伊計島のどちらかのおもろ
賀津連城（勝連ぐすく）	賀津連城（勝連ぐすく）	勝連おもろ群
五欲城（越來ぐすく）	五欲城（越來ぐすく）	越來おもろ群
中具足城（中城ぐすく）	中具足城（中城ぐすく）	中城おもろ群
鬼具足城（おもろの鬼ぐすく）	鬼具足城（大里ぐすくか）	おもろ有り（下の世の主＝南山王の城か）
越法具足城（大ぐすく）	越法具足城（大城ぐすくか）	大城おもろ群
玉具足城（玉城ぐすく）	玉具（足）城（玉城ぐすく）	玉城おもろ群
島尾城（島尻城か豊見城）	嶋尾城（南山ぐすく）	おもろ無し
阿義那之城（瀬長島瀬長ぐすくか）	阿義那之城（瀬長ぐすくの誤記か）	おもろ無し
宝庫（御物ぐすく、王府の倉庫）	見物具足廣（見物具足城の誤記、御物ぐすく）	おもろ無し
浦傍城（浦添ぐすく）	浦傍城（浦添ぐすく）	浦襲おもろ群
奇羅波城（倉波）		倉波おもろ有り
	寄羅溪城（北谷ぐすくか）	北谷おもろ群
白石城	白石城（座喜味ぐすくか）	比定地未詳
那五城（名護ぐすく）		名護おもろ群
	河尻城	比定地未詳
伊麻奇時利城（今帰仁）	伊麻奇時利城（今帰仁）	今帰仁おもろ群

これらの地名は比定地未詳の場合もあるが、おもろ群、あるいは一点のみでもおもろを『おもろさうし』に留めている場合が多い。このことは、その土地に権力と武力を持った者達が割拠していたことを意味する、と考える。李氏朝鮮、そして朝鮮と琉球の間を往還していた博多商人や対馬の賊首、そして東アジアの海を跋扈していた倭寇勢力にとってこれらの場所が重要な意味を持っていたのであろう。

倭寇勢力が商っていたものに貿易陶磁器がある。亀井明德は沖縄における中国の貿易陶磁器の受容は「一部、十二世紀中葉から開始されたが、十三世紀に入ると、かなり広範囲に拡がり、初期のグスクおよびそれに関連するとみられる集落に及んでいる（亀井、1986 a、378）と述べる。そして、陶磁貿易の形態を三つ想定する。

- A、宋、元商船が、本島、宮古、八重山の主たる地に来航し、有力な按司と交易。
- B、各地の有力按司が宋・元へ交易船を発遣して交易。
- C、九州を中心とする日本商船の来航による交易。

亀井はAのケースについて、13世紀を中心に沖縄の各地域で出土する中国陶磁の種類に斉一性がみられ、この現象は売り手側に交易の主導権があり、かつ流通機構が複雑でない場合におこる傾向が強いことを指摘する。そして、「当時の沖縄に政治、経済の統一は存在しないと思われるので、各地の有力領主、すなわち「てだ」、「世の主」が来航する宋・元商人と個別に交易を行っていたと考える。オモロに謡われている、伊祖、勝連、北谷、恩納、今帰仁、糸数、坡名城などの「てだ」、と「世のぬし」が、別表の中国陶磁器出土地と一致しているのに注目しておきたい」と指摘する。

以下、亀井が沖縄島の貿易陶磁器出土地を示した表（1986 a）と、亀井の他の報告によって貿易陶磁器出土が確認される地名でおもろの用例のある場所をあげる。また「琉球国之図」と「琉球国図」の二枚の地図に地名記載の有無、貿易品であった石鍋の出土の有無、そしておもろの玉御柄杓たまみしやくこと莫大な富の象徴であるヤコウガイの貝匙が謡われているかどうかともあわせて指摘する。なお琉球国之図、琉球国図で比定地未詳の場所の国頭城、池具足城、鬼具足城、島尾城、阿義那之城、御物ぐすく、倉波、白石城、河尻城は除外した。

遺跡名	所在地	輸入貿易陶磁器の年代	地図に記載の有無	石鍋等の有無
南山城	糸満市	13世紀～16世紀	琉球国図	玉御柄杓
坡名城古島遺跡	具志頭村	12世紀～14世紀		
糸数ぐすく	玉城村	13世紀～15世紀		
佐敷ぐすく	佐敷村	13世紀～15世紀		石鍋
稲福遺跡	大里村	12世紀～14世紀		
我謝遺跡	西原村	13世紀～14世紀		石鍋
浦添ぐすく	浦添市	13世紀～16世紀	二枚の地図	玉御柄杓
真久原遺跡	浦添伊祖	13世紀～15世紀		石鍋
親富祖遺跡	屋富祖	13世紀～16世紀		
北谷ぐすく	北谷町	13世紀～15世紀	琉球国図	
屋良ぐすく	嘉手納町	13世紀～14世紀		
熱田貝塚	恩納村	12世紀		
尾我ぐすく	名護市	13世紀		
今帰仁ぐすく	今帰仁村	13世紀～16世紀	二枚の地図	石鍋
城遺跡	奄美笠利	13世紀～15世紀		

以下は亀井の表（1986 a）には無いが、おもろで謡われ、二枚の地図に地名を書かれ、沖縄島の外からもたらされた遺物のある土地である。

遺跡名	所在地	地図に記載の有無	石鍋等の有無
玉城ぐすく	玉城村	二枚の地図	石鍋・玉御柄杓
勝連ぐすく	勝連町	二枚の地図	玉御柄杓
中城ぐすく	中城村	二枚の地図	
越來ぐすく	沖縄市	二枚の地図	
大城ぐすく	北中城村	二枚の地図	
久米島	久米島	二枚の地図	玉御柄杓

勝連ぐすくからは元時代の世界的な交易品、上質の元青花白磁製品が出土している。また、久米島はヤコウガイ産地であり、貝匙製作所も存在していた。その久米島の久米中城按司の居城とされる宇江ぐすく、具志川按司の居城とされる具志川ぐすく、伊敷索按司の居城とされる伊敷索ぐすくからも、それぞれ

輸入貿易陶磁器が出土する（亀井、2004、118～120）。そしておもろに登場するいずれの土地にも、富を集め、力を誇る男性権力者がいたことが謡われる。

これら二枚の地図の地名と輸入貿易陶磁器の出土地、そして地方おもろで謡われる地名は重なっている場合もあり、そうでない場合もある。15世紀半ばの博多商人の道安が過去の権力者、即ち輸入貿易陶磁器の年代の古い土地のかつての支配者に関心を示すはずはない。そう考えると14世紀以前の輸入貿易陶磁器が出土する玻名城、稲福、我謝、屋良ぐすく、熱田貝塚、尾我ぐすくなどが二枚の地図に記されない理由が諒解できる。

一方、『おもろさうし』の地方おもろ世界には玻名城、稲福、我謝が登場する。我謝のある西原間切には倭寇地名である「ゴリヤ」が残されている（吉成・福、2007、65～66、252～257）。そして西原間切は第二尚王統の政治的原型の地である。始祖王の金丸は即位以前、西原の地頭だったと正史は語る。また、我謝からは石鍋も出土する。かつて我謝の浦を交易の拠点としていた倭寇の集団の末裔が王を名乗るようになったとき、我謝を含む西原に宗教的に大きな意味を持たせたことを、おもろの用例や正史、そして『琉球国由来記』の記述から知ることができる。

また、玻名城や稲福の権力者もおもろに謡われている。玻名城や稲福のかつての権力者もおもろは賛美しているのである。地方おもろの年代の幅は必ずしも明らかでは無いが、輸入貿易陶磁器のあり方から、12世紀から15世紀に実在した倭寇的な男性権力者を謡った、と考える。この年代は仲原善忠が『おもろ新釈』でおもろを所産した三つの時代、と考えた部落時代（5、6～12世紀）、按司時代（12～15世紀）、王国時代前期（15～17世紀）の按司時代に相当する。なお外間守善もおもろの年代については仲原説を踏襲している（外間守善、2000下巻、456）。

しかし按司時代以前の5世紀から12世紀の部落時代におもろが所産された、という年代設定はおもろを故意に古代に引き寄せて解釈しようとする恣意があり、到底承服し得ない。文字資料を残さなかったことにより、沖縄島の歴史が未発達で住む人々が古代そのままの心性であったと考えてきた先学の姿勢は、文字による論理を絶対視し過ぎている。

前近代、世界の大多数の人々は文字によって論理的に思考することなどな

かったのである。現代もそのような人々は数多い。だからと言って、彼らが未開のままで知的能力が貧困なわけではない。彼らは文字を持つ近代人とは全く違う方法で世界の有様を把握し、それを表現する方法を知っている。

歌謡に限定すれば、口に出して謡うことが原態なので、リズムに乗って細分化された事柄を順序立て、快く繰り返し語り、語り手と聞き手の心をともに高揚させる、ということである。そのようなあり方はヤマトの記紀歌謡や柿本人麻呂の対語対句の整った壮大な長歌、そしてアイヌの神謡やおもろに見受けられる。文字を持ったとき、まず『おもろさうし』を編纂した琉球王国にあって、おもろは古代的に見える側面が多分にあるが、古代の心性の産物ではない。

それでは『海東諸国紀』の「琉球国之図」の地名のある土地をおもろはいかに謡うのか、またおもろから「琉球国之図」の地名比定について何らかの知見を得ることができるのか、以下で検討する。

おもろ地名と「琉球国之図」の地名

国頭城

安里進は竹森道悦の「琉球国図」の国頭城を根謝銘グスクとする（安里、2006、35）。しかし、琉球国都に次いで大きく描かれる国頭城を規模の小さい根謝銘グスクに比定することには、疑問がある。

『海東諸国紀』は第一尚氏の最後の王、尚徳王が鬼界島（喜界島）を征討して奇勝した、とされる1466年の5年後に成立している。奄美群島の喜界島には大宰府政庁と相似した遺物が出土する城久遺跡群が存在する。城久遺跡群の時代は8世紀から12世紀であるが、15世紀当時も琉球王国にとって侮り難い勢力が喜界島に存在したからこそ、尚徳王が鬼界島征討を行ったと考える。

沖縄島の北部は奄美群島と同一の文化複合を持つ。吉成直樹氏の御教示によると、この国頭城は奄美群島も含めた北部琉球の勢力の拠点だった可能性があるのではないかと。琉球が沖縄島の南の琉球国都、首里を中心とする王国を建国しつつあった時期、北部琉球勢力が拠点としていた島が今帰仁ぐすく以北にあり、その情報が沖縄島の北に大きく記された可能性を考えたい。

なお、『沖縄県姓氏家系大辞典』は国頭郡大宜味村の先史からグスク時代に

ついて「根謝銘城北麓の屋嘉比付近には、田嘉里川（屋嘉比川）の河口があり、他島・他間切との貿易港であり、『おもろさうし』にもその繁栄のさまが歌われ、屋嘉比は大宜味間切創設以前の国頭間切の主邑（主村）であった（沖縄県姓氏家系大辞典編纂委員会編纂、1992、149）」と記す。

屋嘉比のおもろは航海おもろの巻十三 - 九二一にあり、「一屋嘉比杜 おわる／親のろは 崇べて／吾 守て／此渡 渡しよわれ／又赤丸に おわる／くの君 崇べて（注）」となっている。大意は屋嘉比杜にまします親のろ神女、赤丸（国頭村桃原）にましますてくの君神女を崇敬して、我々を守ってこの海を渡し給え、である。航海者の視点として、国頭の屋嘉比杜と赤丸に航海守護の灵力で名高い神女がいたことがわかる。

池具足城

田中健夫は池具足城を東恩納寛惇の見解により名護市池城とする。安里進は竹森道悦の「琉球国図」の池具足城を伊計グスクとする。『おもろさうし』には名護市池城、そして伊計島の伊計ぐすくのおもろがともに存在する。

名護市池城のおもろは巻十七 - 一一八七で「一聞へ池城／見らんすが 亡び／聞ゑ鬼／見ちやすが 勝り／又鳴響む池城」となっている。大意は名高く鳴り轟く池城、見ない者は亡び、見た者は勝れる、である。

このおもろは意味が通り辛い、池城に「聞ゑ鬼」がいることが謡われている。この「鬼」とは、『おもろさうし』では魔術的な武力、鬼神のような戦闘性を誇る者を意味する（福・吉成、2007、22～36）。鬼の他の用例に「鬼の殿が弓弦を鳴らし（鳴弦、本土での魔除けの作法）、田に舞う鳥を射落とす（巻十四 - 一〇四四）」というおもろがある。本土的に殿と呼ばれる者は魔除けの呪具としての弓と武器としての矢を使いこなし、弓術の腕前を賛美される。池城の鬼も不可視の鬼ではなく、戦闘性を誇った人間像が投影されているのではない。この池城が池具足城である可能性は十分ある。

また伊計ぐすくのおもろは巻十六 - 一一五〇にあり、「一伊計ぐすく親のろ／綾子橋 掛けわちへ／島 かねて／おぎやか思いに みおやせ／又まちらすの親のろ」となっている。大意は伊計島の伊計ぐすくの、まちらすの親のろ神女、美しい橋を掛け給いて、島を囲い統べて尚真王様に奉れ、である。

このおもろには「島 かねて」という詞句がある。その意味を「小権力者の支配する島を取り囲んで攻略する」と解釈したことがある（福、2007 a、68～71）。伊計島は与勝半島の東方洋上に連なる平安座島、宮城島、伊計島のうちのひとつである。伊計島から宮城島、平安座島まで橋を掛けるよう支配権を確立し、おもろ世界で神格化される尚真王に奉れ、というのがこのおもろの趣旨である。島々に橋を掛けるように、とは与勝半島の東方洋上の島々の支配権、そしてその海域の制海権を確立することである、と考える。

一一五〇に「島 かねて」という詞句が登場することは、琉球王国第二尚王統成立前夜、「島を取り囲んで攻略する」ような支配者がその海域の島にいたことを示唆するのではないか。神女と美しい（あやご）橋という祈願の言葉の背景に、与勝半島の東方洋上の島で武力を誇った者、あるいは制海権を握り、沖縄島東海岸の勝連按司や中城按司の交易船の権益を脅かしていた者の姿が見え隠れする。

このおもろは、伊計島を本拠地とする者が尚真王に制海権を捧げたことを意味しているのではないか。沖縄島東の近海の制海権は第二尚王統にとって極めて重要である。制海権の要の島、伊計島に強大な力を持った支配者がおり、その者が第二尚氏に味方したならば、王権樹立のための大きな力になる。池具足城が伊計島を意味する可能性は十分にある。

このようにおもろの用例からは『海東諸国紀』の「池具足城」は名護市の池城、伊計島のどちらともとれる。

賀通連城

このぐすくは現在のうま市の勝連ぐすくである。勝連ぐすくとその支配者の阿麻和利は勝連おもろ群（巻十六・一一二七～一一四七）で賛美されている。

正史は阿麻和利を第一尚氏第六代尚泰久王時代の逆賊と記す。中山王に取って代わろうとする野望を持っていた阿麻和利は、まず中城の護佐丸を姦計に陥れて自害させた。尚泰久王の娘で阿麻和利の妻、そしてシャーマン性の強い神女でもあった百度踏み揚げりが謀反を父王に知らせ、阿麻和利は滅ぼされた、というのである。しかし、おもろ世界では阿麻和利は尚泰久王に並ぶ存在と謡われ（一一三四）、勝連は鎌倉に譬えられる（一一四四）。鎌倉に譬えられる土

地はおもろでは勝連のみである。鎌倉時代の鎌倉は禅宗寺院が競って勧進船を出し、『徒然草』の作者、兼好法師が眉をひそめるほどの唐物で溢れていた。その鎌倉からも出土しない元染付「至正タイプ」の優品を取引していたのが勝連勢力である。

『海東諸国紀』の永楽十六(1418)年の記事には「琉球国中山王二男賀通連寓鎮」と称する人物が「兄が亡くなったので自分が朝鮮と正式に通商関係を結ぶ」とある。この「賀通連」は朝鮮王朝の『世宗実録』の同年の記事に青磁を献上し、入貢した、とされる人物と同一ではないか。中国との交易によって得た青磁を、亡き王の弟を自称した賀通連は琉球各地、薩南、博多、そして朝鮮まで交易を企てていたと推察される、という先学の指摘もある。考古学的出土遺物の高級輸入陶磁器や高麗瓦と朝鮮側の断片的な記事は、勝連の富の豊かさや勝連の名を持つ男性支配者の権力を彷彿とさせる。これらの勝連のあり方は、正史の語る阿麻和利像よりも、おもろ世界の阿麻和利に近い(福、2007 b)。

五欲城

このぐすくは現沖縄市の越來ぐすくである。

越來を謡った越來おもろ群(巻二・七一～八四)からは、越來には「世の主」と称される支配者(七八～八二)がおり、そのぐすくは「越來こえく照るこて曲わ」「見物もの小照るこて曲わ」(越來の立派な照り輝くぐすく囲い)とおもろにある。越來おもろ群の最初のおもろ(七一)には「百浦もいうら 添そわる 拍子ひやし(多くの港湾集落を支配する拍子)」という語がある。越來杜ぐすくの祭祀で、「百浦添わる拍子を打って奉れ」と謡われるのである。この百浦は、百浦まちらす神女(大和、京、鎌倉から果報〈幸運、富〉を引き寄せる按司を謡う三七七の神女)の百浦でもある。この百浦は沖縄島のみならず、日本の大都市も含む。越來おもろ群に「百浦」が登場するのは、越來にヤマトを含めた多くの港湾都市を意識する交易従事者が存在したことを意味する(吉成・福、2007、69～71)。

越來には胡屋(ごや)という地名があり、倭寇地名の「ゴリヤ」からの変化の可能性がある。越來は第一尚氏の王、尚泰久王の本拠地とされる。

尚泰久王に関わる二・七八のおもろは「一越來こえく世めしの主なの／真太また求ちよも思いな 生なし
よわちへ／此れど 果報かほうてだ／越來こえくの 有あらぎやめ ちよわれ／又揚がる世あの

ぬし主の」で、大意は越来世の主が真太求思（尚泰久王）を生み給いて、これこそ果報をもたらすてだである、越来の有る限りましませ、である。このおもろは尚泰久王を第一尚氏の王の子などではなく、越来の支配者の子、としている。おもろの謡う尚泰久の出自について、更なる考察の必要を指摘しておく。

越来の支配者は高所である古謝こぢや降り頂つちに六本柱の高倉を造り、その倉は国中かみしも（上下）の人達が見事だという、と謡うおもろがある（巻十四 - 一〇〇二）。おもろでは沖縄島の北を上、南を下と称し、上下で沖縄島全体を意味する。上下は『おもろさうし』では尚真王を賛美する巻五に用例がたびたび見受けられる（吉成・福、2006、147）。巻五の上下は第二尚氏の支配する王国そのものを意味しているのである。

上下のおもろでの意味を知った上で越来の一〇〇二の用例を再考すると、越来には沖縄島全体に鳴り轟く富を誇る支配者がいた、とおもろに謡われていたことがわかる。その人物とは倭寇であり、越来に出自を持つ、とされる尚泰久もまた倭寇だったと考える。

中具足城

このぐすくは中城ぐすくであり、巻二に中城おもろ群（四二～六四）があり、中城の支配者とぐすくが賛美されている。

中城ぐすくは護佐丸が築城した、と伝えられる。中城おもろには、中城は中心の国（根国、国の根）であり、徳之島（徳）や奄美大島（大みや）の支配権を引き寄せよ（五三）、北かみ（上）から多くの按司達が攻めてきたなら、押し戻せ（四七）、攻めて（敵を）討とう（四五）、大国ちやくに（沖縄島）を支配する中城（四二）、と謡われる。これらの用例は、武力に長け、奄美群島の支配権をうかがう男性支配者が中城にいたことを示唆する。中城で清冽な泉清水いぢみさうずを出しそれを国中の人々が羨ましがる（四九）、名高い中城に按司達が持っている宝を寄せよ（五四）、は中城に水量豊かな井泉みつまはがあること、そして中城に集まる富を謡っている。中城おもろには「玉の三廻り」があらわれる。三個の勾玉を廻すことで形成される三つ巴紋である。この三つ巴紋は王家の家紋であり、倭寇の奉斎する八幡神の神紋でもある。この三つ巴紋が現れるのは、おもろ世界では王家、中城、そして大里である。大里按司こと下の世の主は南山王でもあり、権勢を誇った様

子がおもろからもうかがえる。中城ぐすくの主についての真実は不明だが、強大な権力を誇った支配者がそこに君臨していたことは間違いない。

鬼具足城

『おもろさうし』には「鬼ぐすく」を謡ったおもろが巻六・三二七、三三二、巻八・四二四、四二七、巻九・四九五にある。まず巻六の用例とその周囲の用例をあげる。

巻六・三二七

一君^{きみ}加^が那^な志^し／君^{きみ}の^あ按^ち司^しす 知^しり^{かみ}ゆ^{おそ}わ^{かな}め／上^{かみ}下^{おそ} 襲^{かな}て 適^{かな}わしよ^{かな}われ
又^あ吾^なが^な成^なさい^{きよ}子^し／て^なだ^{きよ}成^しさい^し子^しす 知^しり^{かみ}よ^{おそ}わ^{かな}め
又^{よきな}沖^{なつ}縄^た 夏^た 立^たて^たば^た／命^{いのち}神^{かみ}使^{つか}い／又^{おに}鬼^{おに}ぐ^{なつ}すく 夏^た 立^たて^たば^た／命^{いのち}神^{かみ}使^{つか}い
又^わ我^{おやくに}が^{なつ}親^た国^た 夏^た 立^たて^たば^た／命^{いのち}神^{かみ}使^{つか}い

(大意 君加那志、君の按司こそ、わが父なるお方、国王様こそその治世だ、国中を支配し従わせよ、沖縄・鬼ぐすく・わが親国が夏になれば、命神を使いを出して招請せよ)

このおもろは、巫性の強い高級神女、君加那志（吉成・福、2006、109～112）と国王が国中を支配する祭祀を行っている情景だと考える。そして国土である「沖縄」、国土沖縄の美称の「我が親国」と「鬼ぐすく」が等価で対を形成していることは注目に値する。国土沖縄は鬼ぐすくである、鬼の活力溢れる世界である、とおもろは謡っているのである。このおもろの「鬼ぐすく」は沖縄島そのものであろう。

(巻六・三二八 君加那志は首里城で手を摩って祈り、上下を押し合わせてましませ)

(巻六・三二九 名高い君加那志、按司様は島を支配してましませ)

巻六・三三〇

一君^{きみ}加^が那^な志^し／夏^{なつ} 立^たて^たば^た／命^{いのち}神^{かみ} この^なみ^なし^なよ^なわ^なち^なへ
又^わ我^{ざと}が^{なつ}大^た里^た／夏^{なつ} 立^たて^たば^た／又^{たまみ}玉^{しやく}御^{たまみ}柄^{しやく}杓^{たまみ}／又^{たまみ}玉^{しやく}御^{たまみ}ね^{たまみ}ぶ

(大意 君加那志、わが大里は夏になれば命神をまつり給いて、美しい柄杓（ヤコウガイの貝匙）で)

巻六・三三一

一聞^{きこ}ゑ君加那志^{きみがなし}／鳴響^{とよ}む君加那志^{きみがなし}／上下^{かみ}の 大鳴響^{とよ}み
 又下の世の主^{ぬし}や／按司^{あち}の又^{また}の按司^{あち}や

(大意 名高い君加那志神女、下の世の主、按司の中の按司は国中に大いに鳴り轟く)

卷六・三三二

一聞^{きこ}ゑ君加那志^{きみがなし}／降^おれて 鳴響^{とよ}ま／又神座^{かぐら}の競^{けわ}い／撓^{しな}い やちよこ
 又鳴響^{とよ}む君加那志^{きみがなし}／降^おれて 鳴響^{とよ}ま／又おぼつ^{けわ}の競^{しな}い やちよこ
 又聞^{きこ}ゑ鬼^{おに}ぐすく／又赤金^{あかがね}添^そへ鐔^{つば}／又鳴響^{とよ}む鬼^{おに}ぐすく／又白金^{しろがね}玉纏^{たまき}や
 又うち置^おけ うち置^おけ うち置^おけ／又意地^{いぢへき}気^きや 玉纏^{たまき}や
 又玉腰^{たまこし}け うち置^うけ／又すもりやは けつか

(大意 名高く鳴り轟く君加那志は降臨して鳴り轟き、村頭の妻女たち〈祭祀の補佐役〉と和合し、かぐら・おぼつ〈天上の他界、通常はおぼつ・かぐら〉の競いあい〈具体的に何をするか、不明〉をする、名高く鳴り轟く鬼ぐすくで、銅の鐔のついた立派な刀、銀の玉纏のついた立派な刀、〈刀を〉うち置け、すぐれたものは刀、刀をうち置け。(以下は未詳語である))

(卷六・三三三、三三四は首里城での君加那志の祭祀のおもろ)

それでは、君加那志にかかわる三三二の「鬼ぐすく」とはどこかが、問題になる。

君加那志は高級神女であり、国王に対応する。ただ、三三〇で「君加那志」と対になるのは「我が大里」であり、三三一では「上下の 大鳴響み(国中に大いに鳴り轟く)」の「下の世の主」である。この「大鳴響み」という語はおもろ唯一の表現であり、下の世の主の名高さを強調している。

「我が大里」の大里とは大里按司であり、南山王こと下の世の主でもある。大里按司は卷十三・七五〇では「兄部大里^{すざべ}」「良^{ざと}かる大里^よ」と称される。七五〇では航海する際、大君に真南風を乞うと謡われており、おもろ世界では大里は国王の身内同様である。三二七では国王と夏、鬼ぐすく(沖縄・我が親国)でなされた命神祭祀を、三三〇では大里とともにに行っている。下の世の主はおもろで唯一「按司^{あち}の又^{また}の按司^{あち}(按司の中の按司)」と称される。三三二は南山王(下の世の主、大里)の居城のようでもあり、首里城のようでもある。

次に卷八の二例について、周辺のおもろも参考に検討する。なお、卷八は男性のおもろ歌人、「阿嘉^{あか}のお祝^{あづ}付き」と「おもろ音揚^{ねや}がり」のおもろを集成する。

おもろ歌人おもろ群を集成した男性しか登場しない世界は、王を名乗る者の権威が磐石ではなかった時代のあり方をうつす。巻八において第一に賛美されるのは下の世の主であり、尚真王ではない。

(巻八 - 四二〇、四二一は下の世の主にかかわるおもろ、四二二は文意不明、四二三は下の世の主にかかわるおもろ)

巻八 - 四二四

一おもろ音揚がりや／鬼^{おに}ぐすく 気^け合^やわせ／又^せ宣^ねるむ根揚がりや

(大意 おもろ音揚がりは鬼ぐすくで気〈心〉を合わせて)

巻八 - 四二五

一おもろ音揚がりや／居^おり欲^ぼし 愛^{かな}しけ／清^{きよ}らやのみ御^お殿^{どん}

又^せ宣^ねるむ音揚がりや

又下の世の主の (大意、おもろ音揚がりは美しい御殿に居たい、下の世の主の)

(巻八 - 四二六は下の世の主にかかわるおもろだが、文意不明)

巻八 - 四二七

一おもろ音揚がりや／上^のて 見^みちやる 勝^{まさ}り／又^せ宣^ねるむ音揚がりや

又^{きこ}聞^{おに}ゑ鬼ぐすく

(大意 おもろ音揚がりは上って見たところ勝れていた、名高い鬼ぐすくは)

巻八 - 四二八

一おもろ音揚がりや げらへ／宣^せるむ音揚がりや しらへ／沖^{おきな}縄^{なわ} 鳴^{とよ}響^むむ

／真^ま物^{うち}内^み 見^けちやる／又^け今^お日^ひの良^よかる日^ひに げらへ／今^け日^おのき^ひやかる日^ひに

(大意 おもろ音揚がりが良き日に〈おもろを〉作り、沖縄に名高い真物内(建物)を見た)

(巻八 - 四二九 おもろ音揚がりは下の世の主の直〈祭祀〉をして名高くなってましませ)

巻八の四二一から四二九のおもろの中で下の世の主にかかわるおもろは五点ある。これらのおもろの配列の意図は読みきれないが、四二四、四二七の「鬼ぐすく」が下の世の主の居城だった可能性はある。四二五はおもろ音揚がりが鬼ぐすくの美しい御殿に居たい、と述べているように読める。また、四二八の「真物内」を岩波文庫版の脚注は首里城内の聖域とするが、鬼ぐすくの中の建物、ととる事もできる。真物は勝れたものの意味である。おもろ音揚がりがおもろ

を作り、今日の良き日、沖縄に名高い建物を祝福しているようによめる。

以上のように、巻八の鬼ぐすくは下の世の主（南山王、大里）の居城を意味している、と考える。そうすると、巻六 - 三三二の鬼ぐすくもまた、下の世の主の居城ではないか。王府の高級神女が国王の身内の大里のため、大里の鬼ぐすくで祈願する可能性は十分ある、と考える。

また巻九にも君加那志と鬼ぐすくのおもろがある。

巻九 - 四九五

一聞^{きこ}ゑ^{おに}鬼ぐすく／君加那志^{きみがなし} 手^て摩^づて／上^{かみ}下^{しも}／押^おし合^あわちへ ちよわれ
又^と鳴^よ響^{おに}む鬼ぐすく

（名高い鬼ぐすくで君加那志は手を摩って祈願し、国中を押し合わせてましませ）

このおもろでは君加那志が上下、すなわち前述のように琉球王国全体、あるいは沖縄島全体を一つにまとめてましませ、と謡っているようによめる。この祈願は国王のためになされた、と考えるのが自然である。

ただ、上下は巻五の尚真王の支配する国土沖縄であると同時に、前述のように下の世の主が鳴り轟く沖縄島でもある。王の身内であり王位に近かった下の世の主こと大里按司のために君加那志が国中を統一してましませ、と祝福する可能性もある、と考える。

「琉球国之図」の鬼具足城は中城ぐすくの南、大城ぐすくの北に描かれている。琉球国都である首里の東に位置する鬼具足城は、首里城とは別のぐすくである。おもろの鬼ぐすくは、国土沖縄そのものと国王のための祭祀空間を意味する他、下の世の主、大里按司こと南山王の居城、ととれる。

下の世の主は幅広い交易ルートを掌握していた按司の中の按司であり、「玉の三廻り」こと左三つ巴紋を「百^も連^つれ 貫^ぬちへ」と謡われる（巻二十一三五九）。これは玉に糸を通して連ねるように、八幡神の神紋をひそませた多くの倭寇（八幡^{バハン}）船を掌握することを象徴している、と考える。八幡船は八幡大菩薩の旗を掲げていた。八幡大菩薩の靈威は勿論、武力であるが、それはただの武力ではない。鬼神のような、魔術的な武力である。おもろ語の鬼は、まさにその意味を持つ。鬼ぐすくは、魔術的な武力を持つ者たちを掌握する南山王の居城にふさわしい名である。

越法具足城

大ぐすくは島尻郡大里村大城、現南城市であり、おもろには十例謡われている。そのうち四例は大里村大城ではない。巻六・三一八は君加那志が降臨するぐすく、巻十三・五六八は久米島仲里の字根ぐすく、巻十三・八五九の二例は沖永良部島のぐすくである。以下、大里村大城の用例をあげる。

巻十七・一二二三（巻十八・一二五三との重複おもろ）

一大城^{ぐすく}おわる／世^よ掛けにせ^が按司^あの／御駄^み連れ^{ちやづ}が 見物^{みもの}／又^く国根^{くにね} おわる
又^{いと}糸数^{かず} 使い^{つか}／根^ね国の^{くに} 使い^{つか} 〈おもろ語の「使い」とは、使いを出して招くこと〉

（大城、国根におられる世を支配する按司さまの馬の行列が見事だ、糸数からのお招きだ）

巻十七・一二二四（巻十八・一二五四との重複おもろ）

一大城^{ぐすく}親^{おや}軍^{いくさ}／大^{ちやく}国^{にと}鳴^よ響^{いくさ}み^み軍^{みや}／見^くち^ねへ^{おや}ど 見^くあ^ねぐ^{おや}む／又^く国^ねの^{おや}根^{いくさ}の^く親^ね 軍^{おや}

（大城、国の根の名高い軍隊を、見ても見ても、もっと見たいものだ）

巻十七・一二二五（巻十八・一二五五との重複おもろ、用例は各二例）

一^{きこ}聞^{ぐすく}ゑ大^み城^あ／見^{ちやう}揚^たがる^た門^も 建^よて、／し^くけ^くち 持^とち^よ寄^{ぐすく}せれ／又^く鳴^く響^くむ大^く城^{ぐすく}

（大意 名高い大城に見揚げる門を建てて、酒を持ってきて寄せよ）

大城ぐすくの主は行列できるほどの馬の群れを持ち、大国に名高い軍勢を擁し、ぐすくの立派な門には富の象徴の酒が集まるとされる。一二二四の大国鳴響み軍とは、沖縄島に鳴り轟く軍を意味する。富と武力が大城に備わっていたことがおもろから読み取れる。

玉具足城

このぐすくは玉城ぐすくである。玉城とその支配者を賛美する玉城おもろ群は巻十七と巻十八に重複記載されている。巻十七の扉には「恩納より上（国頭郡恩納村より北）のおもろ御さうし」と書かれており、沖縄島南部（現南城市）の玉城ぐすく周辺のおもろが巻十七に記載されているのはおかしい。このことについて、まさに恩納より北の今帰仁勢力と南の玉城勢力が協力し、第二尚王統を樹立したのではないか、という仮説を提示したことがある（吉成・福、2006、258～262）。玉城ぐすくにはアマツツという雨乞いの聖域があり、第二

尚氏の国王も早魃^{ぬし}の時はかつての玉城按司のようにそこで雨乞いを行った、第二尚氏の国王は「島の主てだ」とおもろで謡われるが、玉城按司もまた「島の主てだ」である。第二尚氏の国王は前代の玉城按司から継承すべきものを継承したのである。玉城おもろ群は、玉城の豊かさと按司の権勢を謡う。

玉城からは長崎県西彼杵半島で採れる滑石を材料にした石鍋が出土する。南西諸島に流通した石鍋は11、2世紀の初期のタイプのものが多い。石鍋は玉城のほか、佐敷（第一尚氏の本拠地）、今婦仁、浦添（伊祖）、西原（我謝）など、おもろ時代の有力な按司たちの本拠地から出土することはすでに指摘した。このことは石鍋が流通した後、三～四百年たってもその土地に有力者がいたことを意味する。

玉城からは鎧も発見されている。谷川健一は「よろいを構成する小さな鉄板を発見した例は玉城城のほかにはない（谷川、2007、151）。」と指摘する。谷川は先学の説を引き、この鎧の胴の金具に金メッキした菊紋がついており、日本の室町時代前半のものと考えられる、と述べる。

玉城ぐすくの一帯は琉球王朝神話の聖域が数多く存在し、現代もその聖地を巡る人々が多い。この、いかにも古琉球らしい場所に、平安時代末期、石鍋がもたらされたのである。

玉城ぐすくにも輸入陶磁器はあったはずだが、出土状況の確認の不備、その他の事情から、かつての玉城ぐすくの主の交易の実態ははっきりしない（亀井明德氏談）。それは措いて、玉城には室町時代前期、鎧を着たヤマトの武者が闊歩していた。そのような考古学的事実と、財物が輝き、九州産あるいは九州で購入された日本刀（筑紫ちやら、筑紫の支配者の意味）があり、おもろ拍子を打って盛んに祭祀が行われていた、というおもろ世界を関連付けて考えることができる。

島尾城

島尾城は『海東諸国紀』の地図では沖縄島の南端である。この城は島尻城、あるいは豊見城（生田滋説）と見なされる。沖縄島南端に近いおもろ世界の地名には、^{はなぐすく}波名城（現島尻郡八重瀬町）、^{こめす}米須・石原（伊原）・^{まふに}摩文仁・^{やましろ}山城・^{まかべ}真壁（現糸満市）、などがある。それぞれの土地は僅かずつかおもろで謡われない場

合もあるが、その一帯にはおもろで賛美される男性権力者達がひしめいていたのである。

特に大里按司と並び、笑顔が輝く、というおもろ（巻二十 - 一三五三）のあ
る「真壁太郎ひ思い」こと百島の島討ちをする（一三五四）真壁世の主の本拠
地、真壁からは瓦が出土する。鎌倉芳太郎はこの瓦は癸酉銘の高麗瓦よりやや
時代が下がっている、との見解を示す（鎌倉、1976、39）が、草屋根や板葺き
よりも遥かに高価な瓦葺きの建物を建てて権力を誇示するような者が真壁にい
たのは確実である。

それらの中で「琉球国之図」がどのぐすくを島尾城と認定していたかを判断
するのは難しい。島尾城の南西沖合いに描かれる「阿義那之城」を東恩納寛博、
田中健夫はともに豊見城沖の瀬長島と認定しており、そう考えるならば島尾城
は豊見城の可能性もある。

前掲の地名のうち玻名城おもろ群は巻十九と巻二十に重複記載されている。
特定地域のおもろ群が重複記載されるのは、おもろ世界では久米島（巻十一と
巻二十一）、玉城（巻十七と巻十八）と玻名城のみである。おもろ群が重複記
載されることの意味はよくわからないが、おもろ世界でそれらの土地が重要視
されていたことは間違いない。

玻名城おもろ群で、玻名城按司は「沖繩玻名城ちやら」「沖繩玻名城てだ」
と称される（巻十九 - 一三二八）。「ちやら（支配者）」「てだ（太陽）」はとも
に按司の別称である。「沖繩」が男性支配者の呼称に冠せられるのは、他に
「沖繩按司襲い（巻十 - 五四六）」こと国王のみである。玻名城按司が、沖繩島
の外の世界であったかも沖繩の支配者であるかのような「沖繩玻名城ちやら（て
だ）」と名乗っていた可能性もある、と考える。玻名城は「百倉 引き連れる
御倉（多くの倉を従える倉）」を造営する（巻十九 - 一三二六）、と謡われ
るように富める世界である。玻名城按司は、おもろ世界で唯一、「苦世 甘世
成す てだ（凶年を豊年にする按司）」と謡われる（巻十九 - 一三三〇）。ま
た、首里城で行うような祭祀がなされる、とよめるおもろもある（巻十九 -
一三一八～一三二二）。この玻名城按司は島尾城の主にふさわしい。

玻名城の祭祀には王府の高級神女と同名の神女差笠が登場する。差笠は玻名
城で手を摩って祈願し、そのありさまは「君が金内る かに ある（君が輝く

ような空間にぞ、かくある、岩波文庫版は金内を首里城の聖域、京の内とする、一三一九)」と謡われる。また、差笠が^{あやわし}おもろ世界の支配権の象徴の綾鷺を寄せる^{かねとり}玻名城で、金鳥である鷺を捕らえる、というおもろもある（一三二三）。

おもろ世界で鷺は支配権の象徴を意味し、神女が鷺を捕らえる、という例は他にもある。この差笠のあり方は、大里按司（下の世の主）こと南山王の祭祀を行う王府の高級神女、君加那志を思い起こさせる。おもろ世界で重要視される玻名城按司とは、大里按司と同じく王権草創期の国王の身内同様の存在とみなされていたのかもしれない。

しかし前述のように玻名城出土の輸入陶磁器の年代は12～14世紀と古く、玻名城按司と第一、第二尚王統を簡単に結び付けて考えることはできない。ただ、差笠は聞得大君以前の最高神女職、煽りやへよりも古い最高神女職である。最高神女の祖型と同名の神女が登場する場所（玻名城）に、王権の始原の一つのあり方を宿す権力者がいた、と考えることはできる。

また、山城按司のおもろ群も巻二十の一三三七から一三四九まで記載されており、「西貢^{にしがない} 寄せて^よ 又^{また} 良く^よ 勝る^{まさ} 東貢^{ひがしがない}（西から貢物を寄せ、東からさらに勝る貢物を寄せる、一三四五）」と盛んに富を集積するさまが謡われ、島寄せ・里寄せ（建物の名）を造り「百年^{もゝと} ちよわれ^み 御殿^{おどん}（御殿は永遠にまします、一三三八）」と建造物が賛美される。山城按司は「御顔^{おかう} 下垂^{した}りやが^た 清^{きよ}らや（お顔は豊頬で美しい、一三三七）」であり、そのもとに「百島引き寄せる鷺（多くの集落の支配権を引き寄せる鷺、一三四〇）」が謡われる。山城按司もまた、島尾城の主にふさわしい、とすることができる。

また、豊見城に関しては、旧島尻郡豊見城村我那覇のおもろが三点、平良（たいら）のおもろが一点、巻二十に以下のように記載されている。

巻二十 - 一三六五

一我那覇^{がなは} 鳴響^{とよ}み／御駄^{みちや} 鷺毛^{わしけ}／熊鷹^{くまたか}の槍^{やり} 栄^{ふさ}よわれ／又浦崎^{うらさき}に 鳴響^{とよ}み

（大意 我那覇、浦崎に名高い方、乗馬は鷺の毛色、熊鷹〈熊鷹の飾りのついた〉の槍、栄え給え）

巻二十 - 一三六六

一我那覇^{がなは}杜^{はもり}／鳴響^{とよ}み杜^{もり}ぐすく／なよ宣^せり子^{きよ}／まきよの^{かず}数／てはわ^い 言へ

又赤^{あか}かがい／玉^{たま}かがい 落^{おと}ちやむ／又盗人^{ぬす}猫^{とみや}す／隠^{かく}と猫^{みや}す 盗^とたらめ

(大意 我那覇杜、鳴り轟く杜ぐすく、神女なよ宣り子は集落ごとにおどけたことを言って、赤い糸まり、玉まりを落としたが、盗人猫、隠れ猫こそ盗ったのであろうか)

卷二十 - 一三六七

一つるこにくけ／良^{きよ}かるにくけ／清^はらや 誇^{ほこ}ら 又我那覇^{がなは}掟^{おきて}／鳴響^{とよ}み掟^{おきて}
又あきねなの／浜崎^{はまさき}／又幕^{まこ} 引きやり／蚊帳^{かちや} 下^さげて
又按司^{あち}は 使^{つか}い／ちやは 使^{つか}い

(大意 勝れたにくけさま、美しさを誇ろう、名高い我那覇の役人は我那覇内のあきねなの浜崎に幕を引き、蚊帳を下げて按司様を使いを出してお招きするのだ)

卷二十 - 一三六八

一浦崎^{うらさき}の平良^{たいら}に／鼓^{つづみ} 打ちちへ／遊^{あそ}べば／糸^しの子 平良^{たいら}子^しさらめ
又崎枝^{さきやだ}の平良^{たいら}に

(大意 豊見城村平良で、崎枝の平良で鼓を打って遊べば、糸の子、平良子こそだ)

これらのおもろは豊見城の支配者の乗馬の武装を賛美するほか、赤い糸まりを猫が隠したという俗謡、按司を招待し接客するのに幕を引いて蚊帳をつろう、という接客担当者のつぶやきのようなおもろ、鼓を打つ遊びの一瞬の情景などである。これらのおもろはそれぞれに興味深い、支配者の権勢を誇ったり、支配することへの壮大な気宇を謡うものではない。

勿論、だからと言って豊見城が「日本国之図」の島尾城に比定されない、というわけではない。ただ豊見城に関しては、おもろ編纂者が玻名城ほどの重きは置いていないことを指摘しておく。

なお豊見城の保栄茂には保栄茂按司がおり、保栄茂^{ほへむ}大国^{ちやくに}按司^{あち}・保栄茂^{ほへむ}意地^{いぢへ}氣^き按司^{あち}(巻八 - 三九七)、保栄茂^{ほへむ}世^{ぬし}の主^{ぬし}(巻八 - 四〇九)などと称されていた。この人物は米須(糸満市)の世の主と交流があり首里城に出入していたこと(四〇九)、男性おもろ歌人、おもろ音揚^{ねや}がりに御神酒^{よむいき}の量の多さを賛美される人物であること(三九七)がわかる。この人物は大国按司と称される。大国とは後述のように王権樹立後の国土沖繩を意味し、第一尚氏の尚巴志は佐敷^{さしき}大国按司である。佐敷按司同様の美称を持つ保栄茂^{ほへむ}大国^{ちやくに}按司^{あち}もまた、島尾城の主で

あった可能性があることを指摘しておく。

浦傍城

このぐすくは浦襲ぐすく（現浦添市）であり、浦襲とその支配者を賛美するのが浦襲おもろ群（巻十五 - 一〇七〇～一〇九〇）である。

浦襲^{うらおそい}ぐすくは、第二尚氏に先立つ第一尚氏初期まで王城だったぐすくである。琉球の王統は、舜天王統、英祖王統（太陽と人間の女性の子、とされる。実在の王統）、察度王統、第一尚王統、第二尚王統と続く、とされる。英祖王統に対し、第二尚氏はことのほか思い入れがあり、おもろで第二尚氏の王は「英祖^{ゑいそ}にや末^{すへ}（巻三 - 九七）」「英祖^{ゑいそ}にや真末^{まさせ}（巻一 - 四〇）」と謡われることがある。

浦襲おもろ群は、浦襲の豊穰（米、黍を積み上げる、一〇八五）と豊かさの象徴の酒（一〇八七）、富の集積（一〇七七、一〇七九）を謡う。そして浦襲は「世の頂^{つち}（最高の場所）」と讃えられ（一〇七〇）、「按司^{あぢ}の躰^すで親国^{おやくに}（按司を生み出す親国、一〇七一）」であるから永遠にましませ、と謡われる。浦襲は根国（中心の国）であり、その躰^すで水はおもろ世界の神にして普遍王、尚真王に奉られる（一〇八〇）。躰^すで水とは生命を甦らせる水で、ここでは王を浦襲の始原の王のように^{れい い あふ}霊威溢れる存在にならしめる霊水である。

浦襲は第二尚氏にとって王権の始原の地、としての役割を担っていたのである。首里城正殿の別称は「百浦添^{もいいうらそよ}」である。「浦襲」は港湾集落を支配する、という意味であり「百浦襲（添）」は多くの港湾集落を支配する、という意味である。首里城が浦襲ぐすくの発展形であることを、正殿の別称は示している。

奇羅波城

奇羅波城とは倉波を意味する。『おもろさうし』には一点のみ、倉波おもろがある。

巻九 - 五〇七

一久良波^{くらは}の君^{きみ}の／瀬名波^{せなは}の君^{きみ}の／又下鳴響^{しもとよ}み軍^{いくさ}／下^{しも}の聞きやれ軍^き

又^{あた}辺り^せ 攻めつけて／垣内^{かくち} 攻めつけて

又板門^{いちやちや} 攻めつけて／金門^{かなちや} 攻めつけて

又^{あた}辺り^{おそ} 襲^{おそ}いつけて／垣内^{かくち} 襲^{おそ}いつけて

(大意 久良波〈国頭郡恩納村〉の神女の、瀬名波〈中頭郡読谷村〉の神女の、下〈沖縄島の南部〉に名高く鳴り轟く軍が、ぐすくの周辺を攻めつけて、板門、金門のぐすくを攻めつけて、周辺を征圧して支配することだ)

このおもろは久良波、瀬名波から沖縄島の南部に名高い軍勢を出しているようによめる。

なお田中健夫は奇羅波を読谷山の古名とする。読谷の古墓からは元～明代(14世紀)の青花雲龍文獣首壺が出土する。亀井明德は壺の底部に穴があけられ、口縁部を丁寧に打ち欠いている点からみて、蔵骨器として使われたと考えられる、とする(亀井、1986 b、73)。

景德鎮で生産され、福建省泉州の港から琉球にもたらされた上質の壺は、交易に勤しんだ按司にとって誇るべき威信財である。その威信財を蔵骨器として用いる、ということは究極の威信財の使用法である。また、骨壺に遺骨を納め、墓に埋納する、という慣習は本土のものである。このような葬られ方をした人物とは、本土出身で読谷を本拠地とし、貿易に勤しんでいた者、と考えるべきである。

このように威信財の高級輸入貿易陶磁製品を骨蔵器として用いた人物に、鎌倉幕府の金沢北条氏、北条顕時がいる。1301年に死去した顕時の骨蔵器は龍泉窯青磁の蓋付きの壺である(神奈川県立金沢文庫、2005、31)。本来は酒壺(酒海壺)として使用されたとみられる龍泉窯青磁壺は、沖縄からも出土する。唐物の逸品を骨蔵器として用いた北条顕時のあり方と読谷の古墓の主のあり方は、通じるものがある。

なお読谷山を謡った航海おもろに次のようなものがある。

卷十三 - 八一三

一聞^{きこ}ゑ読谷山^{よんたむざ}／押し上げ^{おや} 見あぐで^み／だりす 走りす ちやれ

又鳴響^{とよ}む読谷山^{よんたむざ}

又上の船^{かみふね} 百御船^{もひおうね}／又下の船^{ふね} 八十御船^{やそおうね}

(大意 名高く鳴り轟く読谷山の押し上げ杜を見たくて、だにこそ走って来たのだ、北の船は百御船が、南の船は八十御船が)

このおもろは読谷山をめざし、北からも南からも多くの船が集まることを謡っている。「百御船」「八十御船」という表現は他に、久米島で造られた船が

那覇港に集まる多くの船の先頭に立つ、と謡うおもろ（巻十三・七九二）のみに登場する。琉球で最も大きい港、那覇港に集まる数多い船と読谷山を目指す数多い船は、おもろ世界では同じ言葉で表現される。

「読谷山に集う数多くの船」というおもろの表現と、青花の壺を威信財として誇った実在の人物は無関係ではない、と考える。

大西崎

大西崎とは読谷崎のことであり、読谷周辺のおもろは『おもろさうし』にある。それは巻十五の一一一六から一一二六である。おもろに謡われる読谷山（崎枝）にいらっしゃる思い真泰期思い、こと宇座の泰期思いとは察度王の弟で一三七二年に明に使いした人物である。この人物が立派な建物を建てた（一一一六）、唐商い（中国との交易）をはやらせた（一一一七）、海に出て立派な建物をみてきた（一一一八）、泰期思いに鏡色の躰で水（透明な若返りの聖水こと酒）を奉れ（一一一九）、と謡われる。

読谷の大にし（崎枝）には太郎つ満月なる人物がおり御肝が栄え（一一二〇）、肝が広い（一一二一）と謡われる。また、読谷村の瀬名波にはとむかちな人物がいたこと（一一二三）、瀬名波に近い比留にも比留のやせの子なる人物がいたことがわかる（一一二四、一一二五）。また読谷村の喜名にはてだ清ら（詳細不明）に使いを出して迎える大庭、広庭があったことが謡われる（一一二六）。ただ、それらの人物がいつ大西崎にいて、具体的にどのような活動をしていたかは、わからない。

なお大にしと崎枝が対になるおもろは巻十三にもあり、なよくら神女の航海守護のもと、船が航海していく様が謡われている（八一、八一二）。

白石城

白石城は比定地未詳で東恩納寛惇は読谷山村の長浜の小字の白石原とし、安里進は「琉球国図」の「白石城」を座喜味ぐすくか、とする。

ともにおもろに用例はないが、座喜味の嶽を謡ったおもろは次のように存在している。

なおこのおもろには、『おもろさうし』で唯一、イリキヤ（薨）が謡われる。

卷十五 - 一一二二

一大にしに 鳴響む／聞ゑなよくら／吾が守る按司襲い／又崎枝に 鳴響む
 又しらし 居てやちよも／又御嶽 居てやちよも
 又板門 軋めかば／誰がて、 思うな／聞ゑなよくら／又金門 軋めかば
 又 薨 ほろめかば／又屋面 ほろめかば

(大意 大にし、崎枝に鳴り轟く名高いなよくら神女、私が守護する按司様、座喜味のしらし嶽、御嶽に居てさえも、板門、金門が軋めいたら誰がそうしたかと思うな、名高いなよくら神女、薨〈家の上棟〉、屋根がかすかに音を立てたら)

このおもろは意味が通りにくい、座喜味の御嶽になよくら神女がおり、ぐすくから板門、金門の軋む音、薨、屋面のかすかな音が聞えることを謡っていると考えられる。このおもろで問題となるのはイリキヤである。『沖縄古語大辞典』のイリカ(薨)の項には「①家の上棟。屋根。茅葺きの家では、屋根の頂部のカマボコ型の部分をいう。日本古語の「薨」に通ずる。②神名。伊是名では現在イルチャ神という。イルチャとは、茅葺の屋根を風に吹き飛ばされないうために、杣を六本挿し込んで黒綱で丈夫にゆわえて置く、この杣をイルチャと称え、イルチャ神はこのイルチャを、「ヨリマシ」にして空から降りと云われている(以下略)」とある。

おもろのイリキヤが神の降臨する屋根の頂か、あるいは薨(瓦)か、にわかに判断することはできない。ただ、このおもろが15世紀前半に護佐丸が築城したとされる座喜味ぐすくを謡っているならば、その当時すでに瓦屋根の建物は琉球に存在していた。浦添ぐすくからは「癸酉年高麗瓦匠造」の銘文を持つ高麗瓦が出土しており、その年代は1273年とも1392年とも言われている。また、おもろ世界では太郎ひ思いという名の世の主が謡われている(巻二十一三五三、一三五四)真壁(糸満市真壁)、勝連ぐすく、名護ぐすく、名護屋部川からも高麗系の瓦が出土している(鎌倉、1976、39)。

座喜味ぐすくからも、また読谷周辺の他のぐすくからも瓦が出土していない以上、このおもろのイリキヤを薨と判断することはできない。ただ、読谷の座喜味付近に立派な門(板門・金門)を持ち、目立つ屋根のある建造物があった、ということがおもろから読み取れることを指摘しておく。

河尻泊

比定地未詳。

世世九浦

この浦は「琉球国之図」では「人居あり」とされ、国頭郡本部町瀬底に比定されている。瀬底のおもろの用例は無い。

那五城

このぐすくは現名護市の名護ぐすくである。卷十七には名護おもろ（一一七九～一一八一）が集成されており、次のようになっている。

卷十七 - 一一七九

一名護なごのこて小照わる曲き／ゑけ／又見物みもの小照こてる曲わ／ゑけ

（大意 名護の小照る曲〈照り輝くぐすく囲い〉よ、ゑけ〈囃し言葉〉、見事な小照る曲よ）

卷十七 - 一一八〇

一名護なご境さかい／親境おやさかい 来よもの／親門おやぢやう 開あけて 吾わん 入いれ、

又おきて掟しやにしや／物言ものいにしや 来よもの

又真羽地まはねじの／たれしけち 来よもの／又安和あわ 屋部やぶの／せにたまり 来よもの

（大意 名護の境、親境に來たからには、役人が、物を言う役の者〈役人〉が來たからには、羽地〈名護市羽地〉の酒〈たれしけち〉が來たからには、安和〈名護市安和〉・屋部〈名護市屋部〉の酒〈せにたまり〉が來たからには、御門を開けて私を入れよ）

卷十七 - 一一八一

一喜瀬きせの子しや 我が弟者わ おとぢや／今いまや 有ある 庭みや 居おたる／今け日よから 屢々しばしば 見みらに

又きちり 越こいて 名護なごの内うち

（大意 喜瀬〈名護市〉の方は我が弟者だ、きちり〈名護から羽地へ行く峠の手前の小字喜知留原〉を越えて名護の内に、今ある庭に居たのだ、今日から時々会いたいものだ）

これらの名護おもろは、石積みではなく土よりなるぐすく、名護ぐすくを賛美するほか、名護に境、すなわち一種の関所のような所があり、その門を開け

でもらって名護の内に入ること、役人や酒を持つ名護周辺の者が出入していたことが謡われる。また、名護にやって来た喜瀬の子を我が弟者、と呼ぶおもろもある。この弟者、という表現はヤマト的である。そして一一八一は喜瀬の子を見かけた名護の内の男性のつぶやきのようなおもろである。

ヤマト中世の土豪の世界の関所や城柵の情景がそのまま移って来たようなおもろ世界の名護のぐすくも、「琉球国之図」に記されている。

伊麻奇時利城

このぐすくは国頭郡今帰仁村の今帰仁ぐすくであり、巻十七に今帰仁おもろ群（一一九四～一二一八）が集成されている。

今帰仁おもろ群は今帰仁按司を「^{くに}国な^{あち}か^{も、あち}按^{おそ}司 襲て ちよわれ（国の中心の按司、大勢の按司を支配してましませ、一一九四）」と謡い、「^{みやきぜん}今帰仁の聞^{きこ}へてだ 天より下の^{わう}王にせてだ（今帰仁の名高いで様は、天下の王であり太陽であるお方、一一九五）」と謡う。この「天より下の王にせてだ」と称されるもう一人の人物は、尚真王である。今帰仁ぐすくは正史の記す三山時代の北山王の居城とされる。その主である今帰仁按司は、北山王に相当する人物である。第一尚氏に攻められて敗死した、と正史が記述する北山王^{はんあんち}攀安知にも当る今帰仁按司を賛美するおもろのあり方は、正史とはかけ離れている。おもろと正史の食い違いは数多いが、おもろが真実を謡っている場合のほうが多いのではないか。今帰仁はおもろ世界では第二尚王統にとっての宗教的原型、として位置付けられている（吉成・福、2006、142～166）。今帰仁を大いに賛美するおもろのあり方は、第二尚王統の王権が北の今帰仁勢力、さらに北方を故郷とすることを暗示している。

この今帰仁ぐすくからも、石鍋、輸入陶磁器などが出土する。沖縄島の北の今帰仁ぐすくは運天港を控え、古くからの貿易の拠点であった。その今帰仁ぐすくが『海東諸国紀』の琉球国之図に記されるのは当然である。

雲見泊

この港は今帰仁にほど近い、要津の運天港を意味する。運天港が重要視されるのは、水深があり、大型船も停泊できる天然の良港であることによる。運天

港の名高いおもろは次のようになっている。

卷十四 - 一〇二七

一勢理客^{せりかく}ののろの／あけしののろ^{あま}の／雨くれ 降ろちへ^お／鎧^{よろい} 濡らちへ^ぬ
 又運天（うむてん）着^つけて／小港^{こみなと} 着^つけて
 又嘉津宇嶽^{かつおうたけ} 下^さがる／雨くれ 降ろちへ^お／鎧^{よろい} 濡らちへ^ぬ
 又大和^{やまと}の軍^{いくさ}／山城^{やしろ}の軍^{いくさ}

（大意 今帰仁村勢理客のあけしののろ神女が雨を降ろして鎧を濡らせ、嘉津宇嶽に下がる（雲から）雨を降ろして鎧を濡らせ、運天港、小港に着いたヤマト・山城から来た武者達）

一〇二七を為朝の来琉を謡ったおもろ、とする見解も先学にはある。それは措いて、このおもろは神女が嘉津宇嶽上の雲から鎧武者の鎧を濡らすための雨を降ろそう、と謡っている。嘉津宇嶽は、国頭にあって雨雲の発生する山である。つまり湿潤な大気が嘉津宇嶽にぶつかり、雨雲が発生するのである。

おもろで神女の雨乞いは運天港から嘉津宇嶽に向かってなされているが、それは雨雲の湧き上がる山である嘉津宇嶽の実情が反映されている。雲見泊とは雲の発生する嘉津宇嶽を見上げる運天港であることを、おもろは示している。

島々

「琉球国之図」には沖縄島周辺の島々も描き込まれている。それぞれの島についておもろの用例の有無を、以下に表示する。なお、永山修一が既に「『おもろさうし』に見える奄美諸島の地名」を表示している（永山、2007、35～36）。小論では「琉球国之図」の島名とおもろの島名の対応を示す他、奄美諸島以外の島の中の細かい地名にも言及する。

琉球国之図の島名	実際の島名	おもろでの表記と番号
鬼界島	喜界島	きゝや（巻一・六に二例、巻十・五五四と巻十三・八六八との重複おもろに各二例）
大島	奄美大島	大みや（巻二・五三、巻十二・七一〇、巻十三・八六七、九三九）

輿論島	与論島	よろん（巻十三・九三一、九三二） かいふた（巻十・五五四に二例、五五五、巻十四・一〇〇九） かゑふた（巻五・二三七、巻十三・八六八に二例、九二八、九二九、九三〇、九三三）
度九島	徳之島	とく（巻二・五三、巻十三・八六七、九三八、九四四に二例） 金の島（巻十・五五四と巻十三・八六八との重複おもろに各二例）
小崎恵羅武島	沖永良部島	ゑらふ（巻十三・八五〇、八五八、八五九、八六〇、八六一、九三五に二例、九三六、九三七、九三八、九四一、九四二、九五八） せりよさ（巻四・一六五、巻十・五五四に二例、巻十三・八六八、九三七に二例、九四〇） せりゆさ（巻十三・八六八）
郡島	古宇利島	崎ぎや杜（巻十三・九一七に二例） おきみつ（巻十三・九一四 日本思想大系『おもろさうし』の解釈。岩波文庫版、『沖縄古語大辞典』では「おきみつな」で水納島とする）
通見島	津堅島	つけん（巻十四・一〇一〇に二例） つれしま（巻十三・七六九 日本思想大系『おもろさうし』の解釈、岩波文庫版、『沖縄古語大辞典』では慶良間列島とする）
有見島	宇堅島	おもろの用例なし
阿義那之城	瀬長島瀬長城か	おもろの用例なし
思何未	須古摩か 奄美大島古見方か	おもろの用例なし
鳥島	硫黄鳥島	おもろの用例なし
恵平也山	伊平屋島	いゑや（巻十三・九五一） ゑひや（巻十三・九一八、九二〇、巻十七・一二一四、一二一六、一二一七に二例） たな（巻十三・九一八） かにきや（巻十七・一二一五）

伊是那	伊是那島	いちゑな（巻十三・九一九、巻十七・一二〇七、一二一四、一二一六） ゑひせにや（巻十三・七七六）
泳島	伊江島	いへ（巻十三・八一五、八一六）
師子島	未詳	おもろの用例なし
栗島	栗国島	おもろの用例なし
計羅婆島即ち百島	慶良間列島	けらま（巻五・二六九、巻八・四一五、巻十三・七七一、八七三）
九米島	久米島	巻十一と巻十二の二巻は久米島おもろ群、他の巻にも用例は多い
花島	花嶼島	おもろの用例なし

これら「琉球国之図」に記された島々のうち、奄美群島の島々のおもろについては他所で論じたことがある（吉成・福、2007／福、2007 a）。

前述のように尚徳王は鬼界島（喜界島）征討を行い、これに奇勝した、とされる。その後の第二尚氏時代に編纂されたおもろ世界からは、奄美群島の賑わいと富の豊かさ、そして奄美群島から沖縄島まで島伝いの航路があったことがうかがえる。なお奄美群島は『おもろさうし』全二十二巻が成立した時（一六二三）は琉球王国の版図から切り離され、薩摩の直轄支配となっていたため、奄美おもろは地方おもろとしては集成されていない。航海おもろの巻（巻十三）、その他に散発的に奄美に関わるおもろがある。おもろからは、沖永良部島や与論島に第二尚王統の宗教的な始原世界が設定されていたこともわかる。

奄美群島は沖縄島を王の名で統べる者にとって過去の北方の敵、あるいは征討の末に版図に入った島々、というばかりではない意味を持っていたのである。

また、久米島もおもろ世界では重要視されている。巻十一と二十一の二巻にわたり、多数のおもろが集成されている久米島は正徳元年（一五〇六）、第二尚王統によって征伐された、と『琉球国由来記』に記される。ただ、「正徳元年丙寅に、御征伐ありけるは、中比叛逆ありけるにや。由緒不伝也」という由来記の記述からは具体的な事実は何もわからない。

おもろの中で久米島の按司は第二尚氏の王のように按司襲いと称され、久米

島の神女名には煽りやへ、差笠、せの君など王府の高級神女と同名の場合も多い。これらの事柄について論じた島村幸一は、王府の高級神女組織の三十三君と同名の君々が、久米島にすべて存在していた可能性がある、と述べる（島村、2000）。

このような久米島のあり方について筆者は他所で、第二尚王統が制圧した久米島という過去の彼方に王権の始原を宿し、第二尚王統成立のために大きな役割を果たした久米島勢力という遠い過去が存在していたのではないかと、また、久米島の祭祀体系を原型に王府の神女祭祀体系が形作られた可能性も視野に入れている、と述べたことがある（福、2007 b、353）。

いずれにせよ、久米島をおもろ世界が重要視していたことは確実である。前述のように、「琉球国之図」は15世紀の博多商人の視点が反映し、倭寇ルートが記されている。その図に描かれている土地や島の権力者を賛美する王統成立以前の地方おもろは、前代の倭寇賛歌、という側面を持つ。沖縄島から中国へ向かう船が必ず沖合いを通る久米島に、時には交易相手、時には海賊となる倭寇勢力が割拠していたからこそ、「琉球国之図」に久米島が記されていた、と考える。

なお、奄美群島、久米島以外の島々についておもろがどのように謡うか、以下に記す。

郡島

この島はコホリ島、つまり古宇利島のこと、とされる。1609年の薩摩軍の琉球進攻の際に古宇利島は船元となり、『琉球渡海日々記』には「こほり」と記されている、という（沖縄県今帰仁村教育委員会、1999、232）。『琉球国由来記』巻十五の今帰仁間切にも郡村、とある。

おもろには古壳利島の「崎ぎや杜」が謡われている。

卷十三 - 九一七

一崎ぎや杜ぐすく／^{ひぢやりかた}左方 浮けわちへ／^{あな}吾が成さが／^ゆ良 走り ^{あま}歎やかせ
又崎ぎや杜ぐすく／^{にぎりかた}右方 浮けわちへ

（大意 古宇利島の崎ぎや杜ぐすくの左方と右方に船を浮かべ給いて、わが父なる方が良く船を走らせ、喜び誇ることよ）

おもろにはまた、「おきみつな」という語があり、古宇利島（岩波思想大系『おもろさうし』）、あるいは瀬底島の沖の水納島（岩波文庫版『おもろさうし』、『沖縄古語大辞典』）のこと、とされる。

そのおもろは次のようになっている。

卷十三 - 九一四

一おきみつな^{わら きよ}笑い子／笑^{わら きよ}い子は 崇^{たか}べて／吾^{あん まぶ} 守^{このと}て／此^{わた}渡 渡しよわれ
又^{こはな}小離^{わら きよ}れの笑い子

（大意 おきみつな、小離れの笑い子、笑い子を崇敬し、私を守護してこの海を渡し給え）

「おきみつな」が瀬底島の沖の水納島に比定された理由は「おきみつな」の対語の「小離れの」による、と考える。

おもろには「離れ」という語が頻出する。沖合いの離れ島、という意味である。それに対し「小離れ」は九一四と九五ーにしか用例が無い。そして九五ーでは伊平屋から見た離れ島、野甫島を意味する。今帰仁ぐすくから北方に望める伊平屋島と伊是名島は「伊平屋の二離れ」と称された。沖縄島から見て二つの離れ島、という意味である。その「離れ」から見た小さい離島が野甫島であり、瀬底島から見た小離れは水納島であろう。

九一四は今帰仁の神女あけしののおもろである九一三と九五ーにはさまれて配列されている。この配列からでは「おきみつな」が水納島か古宇利島かは、わからない。

通見島

この島は津堅島である。つけんの用例は卷十四 - 一〇一〇に二例、他に卷十三 - 七六九の「つれしま」をかつて津堅島と比定する考えがあった。七六九は久米島の御宣^{みぢへ}り子神女^{きよ}の航海守護のおもろで、多くの船が那覇港を目当てにして走っていく、と謡う。その船団を守護するのは蒲葵島^{こぼしま}と連れ島^{つしま}の、高所にまします神女たちなのである。久米島から御宣り子神女が送り出した那覇港を目指す船を、連なっている島、つまり慶良間列島の神女達が守護する、ということは久米島と慶良間列島の位置関係にかなう。

また、「つけん」のおもろは次のようになっている。

卷十四 - 一〇一〇

一津堅伊波ぐすく／津堅せやぐすく／あたらのいとおうの鎧
 又離れ伊波ぐすく／離れせやぐすく

(大意 津堅島の、離れ島の伊波ぐすく、せやぐすくに美しい糸織の鎧よ)

このおもろは離れ島である津堅島の伊波ぐすくに糸織の鎧があることを謡っている。それは、伊波ぐすくの主が鎧を所有していることを意味する、と考える。ある時代の津堅島に、鎧武者がいたことをおもろは語っているのである。

恵平也山

この島は伊平屋島である。伊是名島とともに「伊平屋の二離れ」とおもろで謡われ、中国側の資料に二島で「葉壁山」と書かれるこの島は、正史では第一尚氏の出自の島、とされる。伊平屋島の屋蔵大主の長男として生まれた佐銘川(鮫川)大主が佐敷で力を蓄え、やがて孫の尚巴志が三山を統一し、父の尚思紹を第一尚氏初代の王とした、というのである。

この話の信憑性は措くが、尚思紹の父とされるサメカワ大主という名は高梨修氏の御教示によると、鮫皮を思い起こさせる。鮫皮とは鮫や赤エイの皮であり、日本刀の柄に巻く。つまり、南方物産である鮫皮は日本刀に欠かせない。この鮫皮商人のような名を持つ人物が第一尚氏の遠祖とされているのである。

伊平屋を謡ったおもろは伊平屋と伊是名が対になる場合がある。以下、まず伊平屋のみを謡ったおもろをみていくと、卷十三-九五ーは「伊平屋大屋子(離れ大屋子)が見つけた、小離れ(野甫島)の方に雨模様走っているので精ん君神女こそ帆を傘にして船を守るのだ」となっている。また、卷十三-九一八は「伊平屋の親のろ、田名(伊平屋島の地名)の親のろである名高いまねこせ神女、私を守護してこの海を渡し給え」、九二〇は「伊平屋の方が船を遣る、押し分き(村の草分けから)の親のろ神女を崇敬し、船の追い風を乞い、思うように船を走らせよ」、卷十七-一二一七は「ちやうや上間子が神事をするのにふさわしい果報時を選び、百歳まで末長く誇ってましませ、伊平屋の二離れ、伊平屋の報廻り(神のまします岬)で果報時を選び」となっている。

そして卷十七-一二一五は「かにきや(我喜屋)の親のろ神女、名高いまねこせは私が崇敬する親のろである、何度も祈られてましませ、阿嘉の子、饒波

の子はもう済まされた」となっている。このおもろは伊平屋島の神女と男性おもろ歌人の阿嘉のお祝付き（饒波のお祝付き）が同じ祭祀の場にいるように読める。伊平屋島の我喜屋に在地の神女とおもろ歌人が共に現れる、ということはきわめて興味深い。おもろ歌人の職掌の一部が神女と重なっていることは注目に値する。

なお、伊平屋と伊是名が対になっているのは次の二点のおもろである。

卷十七・一二一四

一伊是名親のろよ／押笠に 知られ、／やへり庭／雲子 積で みおやせ
又伊平屋の親のろよ／又離れ親のろよ

（大意 伊是名島、伊平屋島、離れ島の親のろ神女よ、押笠神女に知らせよ、やへり庭に宝物を積んで奉れ）

このおもろに登場する押笠とは王府の高級神女であり、北山領域にかかわる祭祀にたびたび登場する（吉成・福、2006、257～258）。押笠と伊是名、伊平屋の神女が具体的に何をしていたかわからない。なお第二尚王統時代、伊是名島と伊平屋島の祭祀を統括していたのは伊是名島に住む「伊平屋の阿母加那志」である。一二一四では伊是名と伊平屋に親のろ神女がいたように読めるが、二つの島の祭祀を統括した一人の神女を対としておもろに読み込んだ可能性を指摘しておく。

卷十七・一二一六

一阿嘉の子が／伊是名 居て 見れば／今婦仁は／御酒ど 盛り居る
又饒波の子が／伊平屋に 居て 見れば／今婦仁は

（大意 阿嘉の子、饒波の子が伊是名、伊平屋にいて見れば、今婦仁はお酒を盛っている）

このおもろは前述のように伊平屋島の神女とともに祭祀を行った、とされるおもろ歌人の阿嘉のお祝付きが伊平屋の二離れこと伊是名島と伊平屋島から今婦仁を望見し、今婦仁で盛大に酒盛りが行われていることを賛美している。今婦仁を第一尚氏（伊平屋島）、第二尚氏（伊是名島）それぞれの王権の故郷から望見し、賛美する意味は何だろうか。

伊是那

この島は伊是那島である。伊是那と伊平屋が並称されるおもろについては前述した。その他、卷十三・七七六は「伊是那名のゆら金^{ゑひ ぜ にや}が遣らい富（船）を浮かべ、使いを出して招き喜べ、吾がお方が使いを出してお招きになる」、そして卷十三・九一九は「伊是那親のろ、離れ親のろ、若子^{わかきよかな}愛し^あけが御船^{お うね}は飛ぶ鳥である隼と競ってぞいる」となっている。伊是那島の親のろ神女が航海守護をした、と考えられる若子愛しけが御船のスピードある様を隼と競うほど、と賛美している。

また、一二〇七は次のようなおもろである。

卷十七・一二〇七

一伊是那^{い ちへ な}しうこ^も思い／大国^{ぢやくに}しうこ^{わかまつ}思い／若松が とくらし

又ひやにや中ぐすく／中ぐすく^{のぼ} 上て

又頂^{つちや} 中ぐすく／中ぐすく^{のぼ} 上て

（大意 伊是那しうこ思い、大国しうこ思い、若松がとくらし、ひやにや中ぐすく、頂である中ぐすくに上って）

このおもろのしうこ思い、若松、とくらしはすべて人名と思われるが、それぞれの関係はわからない。

このおもろで注目すべきは、伊是那の対として大国^{ぢやくに}が用いられている点である。大国は「ちやくに」「たくに」としておもろに七二例ある。用例の中心は国王の支配する国土沖縄を意味する三四例、そして王府祭祀において重要視されていた聖域の知念杜の美称の一五例、佐敷按司こと第一尚氏の王権を樹立した尚巴志の美称の六例、王府の船、他の船名の美称の六例、久米島を来訪する神の名「み（に）るやにや大国神（海の彼方の大国、おそらく沖縄島から渡来した刀を差した人）」の二例、大城（島尻郡大里村）の沖縄島に名高い軍隊の美称の二例、謝名掟（宜野湾の大謝名の役人）の美称の二例、ほか一例ずつの島尻郡豊見城の保栄茂大国按司、大国端（船団の先頭の船）、大国川上（名護市川上の美称）、伊計島の伊計杜の美称としての大国杜、そして伊是那しうこ思いの美称の大国しうこ思いの用例がある。大国とは国土沖縄の他、第二尚氏の祭祀において重要な役割を果たした知念杜、そして前代の王の出自の地佐敷などの美称となる場合が多い（福、2003、20～24）。

それでは、なぜ大国が小さな離れ島、伊是名島の対語となるのだろうか。

それは、伊是名島が第二尚氏の始祖、金丸の出自の地、として整序されたからである、と考える。尚真王時代、伊是名島には金丸の両親を祀る伊是名玉陵が造営され、金丸の姉を祖とする「伊平屋の阿母加那志」^{いへや あもかなし}が王府の神女組織、三十三君の一員の在地の高級神女として位置付けられた。伊是名のろ、こと伊平屋の阿母加那志はまさに始祖王の姉であり、原おなり神の原型を担う。伊是名島には金丸の臍の緒を埋めた、とされる「みほ所所」など、王権の原型を象徴する遺跡が多い。

『おもろさうし』のおもろ、正史の記述、そして『琉球国由来記』の伊是名島に関する記事からは、第二尚王統の王権が金丸の故郷である伊是名島を原型とし、そこから拡大していった、という第二尚氏の神話整序の意図が反映されている。王権の原点の島であるから、伊是名島は第二尚氏にとっての国土沖縄を意味する大国と対になる、と考える。

大国が国土沖縄（島）を意味しない用例としては謝名掟、伊計杜、保栄茂大国按司、川上、がある。

謝名は察度王こと謝名思いの出身地である。察度王を過去の王統と自認する第二尚王統にとって、謝名は過去の王統の原点である。第一尚氏の王権を樹立した尚巴志が佐敷大国按司と称されるのと、謝名が大国と称されるのには同じ意義がある、と考える。

伊計杜のある伊計島が「琉球国之図」の池具足城である可能性は指摘した。伊計島からは尚真王に「島かねて」奉れ、と謡われる。「尚真王に…を奉れ」という用例は『おもろさうし』に二十九例あり、「理想王に支配のための霊物を奉る」ことを意味する、と考える（吉成・福、2006、44）。おもろにおける伊計島と大国の意味を知った上で再考すると、伊計島を本拠にしていた者が第二尚王統樹立に際し、大きな力を発揮した可能性が浮かんでくる。伊計島を大国と称し、王権の原点の伊是名島と同じ名で呼ぶおもろのあり方は、大航海時代、沖縄島と周辺島嶼を基盤にして成立した海洋国家、琉球王国の側面を示す。

保栄茂大国按司が「琉球国之図」の島尾城の主であった可能性は、前述した。大きな権力を誇り、大国である沖縄に鳴り轟いた者、あるいは王権の原型を何らかの形で担う者であったから保栄茂按司が保栄茂大国按司と称された、と考

えたい。

川上とは名護市の地名であり、卷十七 - 一一八三に「一意地氣川上や／奥人
やれば／思ひ照る日 寄りちへ／又大国川上や（すぐれた川上は、奥の人である
から照る日が寄ったのだ）」と謡われる。川上にいかなる人物がいたのかわ
からないが、名護一帯の地名は卷十七の一一七九～一一八七に多出する。具
体的には名護、羽地、安和、屋部、喜瀬、伊差川、我部祖河、源河、池城である。
源河にいた、とみられる源河成り思ひを謡ったおもろには、「大和の鬼る か
に ある」とある。この詞句は源河成り思ひは大和の鬼でこそある、を意味す
る。この人物は鬼のように魔術的な武力を誇っている、とおもろは語る。

対馬の天童信仰で天童法師の母神として信仰される照る日と同名の神女
が、このおもろには登場する。今帰仁おもろ群の中で照る日は四点のおもろ
(一二〇九、一二一〇、一二一一、一二一三)に謡われ、踊りの上手さと拍子
取りの巧みさ、そして『おもろさうし』唯一の女性でだとして「御み顔の 珍
らしやてだ」と謡われる。

対馬出自の名を持ち、今帰仁おもろで賛美される照る日が名護の意地氣川上・
大国川上に寄った、とするのが一一八三である。川上になぜ照る日が現れ、大
国が冠せられるのか、おもろからは一切、わからない。ただ、ヤマトからの渡
来者が数多くいた、と考えられる名護周辺の中でも目立つ権力者が川上にいた
らしい、という推測を述べておく。

以上のように伊是名島はおもろで王権と密接に結びついた大国という言葉と
対になる。一方、伊是名島は伊平屋島とともに北方から沖縄島に向かう船の出
入を監視することが可能な航海上の重要な島である。伊平屋島出身の鮫川大主
が鮫皮商人のような名であることは前述したが、これらの島々は交易従事者に
とって重要な拠点でもあった、と考える。それだからこそ、「琉球国之図」は
伊平屋島、伊是名島を描きこんでいるのであろう。

泳島

この島は伊江島で、用例は卷十三 - 八一五と八一六の「いへ」、卷十七 -
一二一八の「いゑ」である。八一五の用例は「伊江の按司、按司の中から選ば
れた按司（按司^{あぢき}選^{えら}び）の航海だ、押笠神女に守護されて、私を守ってこの海を

渡し給え」となっている。前述のように高級神女の一員であると同時に北山関連の祭祀の場に登場することがある押笠が、ここでは伊江の按司の航海を守護する神女として謡われている。押笠神女は前掲の伊是名親のろと伊平屋親のろの祭祀のおもろで「雲子（財宝、宝物）」と関連付けられて謡われている。

そして八一六は「伊江の、離れ島のはたころ、按司にせ鳴り思い、真羽地を按司様に奉れ」となっている。「はたころ」は意味未詳である。

このおもろの「はたころ」と「按司にせ鳴り思い」、そして「真羽地を按司様に奉れ」と謡う際の「按司襲い」がいかなる関係にあるか、わからない。また、現在の名護市の羽地を按司様に奉れ、という詞句が具体的に何を意味しているか、わからない。

ただ、八一五の「伊江の按司」の対語は「按司選び」で、『おもろさうし』唯一の例である。また、「按司にせ鳴り思い」も唯一の例である。そして伊江の按司は押笠神女に守護されるのである。

これらの用例から、伊江島を本拠地にし、権勢鳴り轟く按司、とおもろに謡われるような人物がいた、と考える。

伊江島が公への貢納物の集まる島だったことを謡うのが巻十七・一二一八である。

巻十七・一二一八

一伊江^いの東江^{あがるい}に／世^よのつほに／御神酒^{みしやく} 御真^お貢^{まかない}
又^{はな}離れ^{あが(る)い}東江^いに／又^{はな}離れ おわる 吾^{あん}は／又とわけ おわる 吾^{あん}は

(大意 伊江島の、離れ島の東江に公への貢納物である御神酒や御貢祖が、離れ島に、とわけ〈遠方か〉にいる私は)

一二一八のおもろの前半と後半の繋がりがいかなるものかはっきりしないが、伊江島の東江に公への貢納物である御神酒や御貢祖が集積されていたことが謡われているのは確実である。しかしそれらがどこから運ばれてきたのか、伊江の按司のものなのか、伊江を中継点として今帰仁按司、または首里の国王に奉られるのか、といったことはわからない。

伊江島には以上のように富が集まり、『おもろさうし』唯一の表現で賛美される男性支配者がいた。そのような伊江島であるから「琉球国之図」に描かれるのである。

計羅婆島即ち百島

この島々は慶良間列島を意味する。用例は巻五 - 二六九、巻八 - 四一五、巻十三 - 七七一、八七三にある。

巻五 - 二六九は航海守護の霊鳥であり、『おもろさうし』では支配権の象徴でもある鷺（吉成・福、2006、204～216）を「見揚がの鷺」と謡い、中天高く舞う鳥を「鳥む 物 知ると／鷺も 物 知ると（鷺の鳥こそ不可視のものを知る）」と続ける。そして最終節で「久米は いなへやり／慶良間 舞い越ゑて（久米島はやり過ぎ、慶良間を舞い越えて）」と謡う。この霊鳥の鷺は久米島と慶良間列島との位置関係からみて、首里を目指している、と考える。

巻八 - 四一五はおもろ歌人のおもろ音揚げりが首里城瑞泉門に向かう樋川坂にましまして慶良間を凝視なさる（御まぎり しよわちへ）、と謡う。

巻十三 - 七七一は次のようなおもろである。

一沖繩が もちよろ／神にしやが もちよろ
 ／京 見ちへ／百度 見欲さよわれ
 又聞ゑ按司襲いや／鳴響む按司襲いや
 又渡名喜 橋 しよわちへ／慶良間 淀 しよわちへ
 又渡嘉敷に おわちへ／報廻り おわちへ

（大意 沖繩神女、神女さまが靈力をきらめかせて、京の内を見て、何度も見たがり給いて、名高く鳴り轟く国王様は、渡名喜島を橋にし給いて、慶良間列島に留まり給いて、渡嘉敷島におわして、神のおわす岬にましまして）

このおもろの後半では国王が渡名喜島を経て慶良間諸島にましまして、渡嘉敷島におわす、と読める。それならば前半は沖繩神女が聖域京の内を含む首里を何度も見たい、と謡っている、と考える。

このおもろに次ぐ七七二は沖繩神女がかかわるおもろで、国王様が久米島具志川ぐすくにましまして、金福（具志川ぐすくの異称）を造営して、と謡い、七七三では沖繩神女と国王が対になり、沖繩神女が靈力をきらめかせ、「この世 襲て 直しよわちへ（この世を支配して世を直して）」と謡う。これら七七一から七七三の三点のおもろが連続しているのは明らかである。

それならば、七七一が何を謡っているかが問題になる。それを考えるヒントは七七二にある。七七二は前述のような内容であるが、なぜ国王と国土沖繩の

名を持つ神女が久米島具志川ぐすくにましまし、金福を造営しなければならなかったのだろうか。

それは、琉球王国からみた久米島の位置付けと深く関わる。久米島が1506年、第二尚王統によって征伐された、と『琉球国由来記』に記されていることは前述した。この記事が事実を反映しているならば、1471年の『海東諸国紀』成立当時、久米島には王権に完全に従属しない勢力が割拠していた可能性は十分にある。

仮に七七二が1506年以降のおもろだとすると、久米島征討後、国王と沖縄神女が久米島具志川ぐすくに赴き、新たな久米島具志川ぐすくを造営したことを謡っている、と考えられる。『おもろさうし』のおもろは始原回帰への志向が強く、神格化された男女が聖域を造営することを謡うおもろは数多い。ぐすくや聖域は始原世界に立ち帰る場所であり、聖地を原点に世界が構築され、拡大していく、という思想があったと考えられる（吉成・福、2006、70～76）。

このおもろは王権に従属しなかった久米島具志川勢力を征討して後、王権に従順な具志川ぐすくを国王と国土沖縄の名を持つ神女が、新生具志川ぐすくとして構築したことを謡っているのではないか。

そう考えると七七一もまた、沖縄島の西の海上要衝となる渡名喜島、慶良間列島、渡嘉敷島に割拠し、第二尚王統に反抗的だった勢力を征討したことを謡っているのではないか。「琉球国之図」の池具足城の可能性のある伊計島のおもろについて前述したように、島々に橋を掛ける、とは洋上の島々の支配権、そしてその海域の制海権を確立することをおもろでは意味している、と考える。沖縄島から中国へ向かう航路上に位置するこれらの島々と久米島の支配権を確立するのは琉球王国にとって重要な意味を持つ。

久米島征討は辛うじて記録に残っているが、渡名喜島、慶良間列島、渡嘉敷島征討の記録は存在しない。しかし、おもろの断片的な記述はこれらの島々の戦略的重要性と、定かでは無い過去に第二尚王統による武力行使があった可能性を伝える。そのようにまつろわぬ、そして力を持った男性支配者達が割拠していたからこそ、慶良間列島は「琉球国之図」に描かれていたのではないか。

なお渡嘉敷島の阿波連浦貝塚からは南九州系の黒川式土器が出土する。そして、座間味村の古座間味貝塚からは奄美地方の面縄東洞式土器や黒曜石が出土

する（沖縄県姓氏家系大辞典編纂委員会、1992、235、238）。このことは慶良間列島の島々に古くから北方文化が流入していたことを意味する。その慶良間列島周辺の多くの島々に、15世紀、実際に割拠していた者達がいたことを「琉球国之図」は示している、と考える。

おわりに

『海東諸国紀』は15世紀後半の琉球の消息を伝える。地図に記される地名、そして島の大きさはそこを拠点としていた交易従事者の勢力に比例している、と考える。この地図に登場するぐすくのほとんどが『おもろさうし』に現れる。勿論、比定地未詳のぐすくもあるが、おもろは統一王権成立前、沖縄島に多くの男性支配者達が割拠していたことを伝える。『海東諸国紀』の「琉球国之図」とおもろの地名を比較検討することにより、おもろが荒唐無稽な絵空事ではなく、おもろなりに過去の断片を伝えていることを知ることができる。

あわせて島嶼の集合体である琉球王国において、個々の島がいかに重要であるかも、「琉球国之図」は示す。船を見張る島、台風や海賊から逃れるための島、特定の海上ルートを確保するためにどうしても必要な島、制海権と島との関係などの視点は従来のおもろ研究に全く欠けている。島と海からおもろや「琉球国之図」、そして別の歴史史料や地図資料を見直すと新たな知見が得られる、という展望がある。

筆者にとっての多くの課題を指摘し、搁筆する。

注 おもろ本文は岩波文庫版『おもろさうし上・下』（外間守善校注、2000）による。

参考文献

- 安里進『琉球の王権とグスク』山川出版社、2006年。
 沖縄県姓氏家系大辞典編纂委員会編纂『沖縄県姓氏家系大辞典』角川書店、1992年。
 沖縄県今帰仁村教育委員会『なきじん研究3 今帰仁の歴史』1999（1993）年。
 沖縄古語大辞典編纂委員会編『沖縄古語大辞典』角川書店、1995年。
 神奈川県立金沢文庫『神奈川県立金沢文庫開館75周年記念誌 平成のあゆみ』神奈川県立金沢文庫、2005年。
 鎌倉芳太郎『セレバス・沖縄 発掘古陶瓷』国書刊行会、1976年。
 亀井明徳『日本貿易陶磁史の研究』同朋社、1986年a。

亀井明德『九州の中国陶磁』西日本文化協会、1986年b。

亀井明德『日本中世における貿易陶器の生産と受容の構造的解明』權歌書房、2004年。

島村幸一「『地方』で謡われたオモロ」『講座日本の伝承文学 八巻 在地伝承の世界
西日本』三弥生書店、2000年。

下野敏見『民俗学から原日本を見る』吉川弘文館、1999年。

申叔舟著、田中健夫訳注『海東諸国紀』岩波文庫、1991年。

田中健夫『東アジア通交圏と国際認識』吉川弘文館、1997年。

谷川健一『甦る海上の道』、文春新書、2007年。

永山修一「文献史学からみた中世のキカイガシマ」『平成十八年度シンポジウム 古代・
中世の境界領域 - キカイガシマの位置付けをめぐって - 資料集』2007年。

福寛美『沖縄と本土の信仰に見られる他界観の重層性』DTP出版、2003年。

福寛美・吉成直樹「倭寇おもろ」『国際日本学4』法政大学国際日本学研究センター、2007年。

福寛美「奄美群島おもろの世界」『沖縄文化研究33号』法政大学沖縄文化研究所編、
2007年a。

福寛美「勝連おもろのダイナミズム」『声とかたちのアイヌ・琉球史』吉成直樹編、森話
社、2007年b。

外間守善校注『おもろさうし上・下』岩波文庫、2000年。

外間守善・西郷信綱校注『日本思想大系 おもろさうし』岩波書店、1972年。

外間守善・波照間永吉編著『琉球国由来記』角川書店、1997年。

吉成直樹・福寛美『琉球王国と倭寇』森話社、2006年。

吉成直樹・福寛美『琉球王国誕生』森話社、2007年。

<ABSTRACT>

A comparison of the place names on the map of the Ryūkyū kingdom in *Haedong jegukgi* and those in the songs of *Omoro sōshi*

FUKU Hiromi

The topographical source *Haedong jegukgi* 海東諸国紀, published in Li-dynasty Korea in 1471, gives a map of the Ryukyu kingdom. The main subject of this article is to compare the place names given on it with those in the *omoro* songs in the collection *Omoro sōshi* of 1623, the earliest written source of the Ryukyu kingdom. The place names discussed include those of *gusuku* (castle towns) on Okinawa Island such as Kunigami, Ikegusuku, Katsuren, Goeku, Nakagusuku, Onigusuku, Ōgusuku, Tamagusuku, Shimaogusuku, Urasoe, Kuraha, Nago, and Nakajin, as well as other place names like Ōnishisaki and Kumominotomari. *Omoro* songs of outer islands such as Kouri island, Tsuken Island, Iheya Island, Izena Island, Ie Island, and the Kerama Islands are also considered.

The map of the Ryukyu kingdom in *Haedong jegukgi* provides us with information about Ryukyu in the latter half of the fifteenth century. It is postulated here that the place names and the relative sizes given to the various islands on the map are proportional to the strength of the traders who were based on each of them. The names of most of the *gusuku* on the map appear in *Omoro sōshi*. We know from the *omoro* songs that many powerful men ruled in the areas that were later united to form the Ryukyu kingdom. A comparison of the place names in the *Haedong jegukgi* map and the *omoro* songs confirms that the songs do indeed convey important, if fragmentary, information about the pre-unification past.

The degree of importance of each of the islands that make up the kingdom, as shown proportionally in the *Haedong jegukgi* map, also relates to various matters that have previously attracted little attention in studies of the *omoro* songs, such as their command of the surrounding seas, their suitability as havens from typhoons and pirates, and their vicinity to specific sea routes.

The article concludes with a discussion of the possibilities for future research in the comparative study of *omoro* place names and those to be found on the *Haedong jegukgi* map and in other historical and topographical source materials.